黒武者兄妹記（仮）

白鳳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黒武者兄妹記（仮）

【Ｎコード】
Ｎ０４７０Ｕ

【作者名】
白鳳

【あらすじ】
守と真奈美の兄妹はごくごく平凡で何の不自由もない生活を送ってきたのだが、守のクラスに時期外れの転校生・木下真人がやってきて以来、二人の運命の歯車が少しずつ狂い始め、それぞれの知られざる秘密や過去が明らかになっていく――、

はじめての大仕事（1）（前書き）

読者の皆様、始めまして　白鳳（はくほう）と申します。この作品が処女作ですので至らない所が多々あると思いますが、ご愛読いただけたら幸いです。

尚、不定期更新となりますことをご了承ください。

はじめての大仕事（1）

―深夜、某所にて―

「こんな時間に呼び出すなんて勘弁してくださいよ、明日に差し支えるんですから。」

「いやぁ悪い悪い。だがな、それほどに重要なことなのだよ。」

「それなら勿体つけずに言ってくださいよ、支部長。」

「ぐっ…、いつものようにしてくれんか？君に支部長といわれるのはどうもイカン。」

「わかりましたよ、おやっさん。」

「うむ、やはりそうでなくては。では本題に入るが…君に仕事を頼みたい。」

仕事？仕事ならいつものように電話で直接いえばいいのに、そうでないあたりきっとなにかあるのだろう。

「今回の仕事では、とある要人を始末してもらう。」

なんだ？その要人が超大物だとでも言うのか？

「だが、ここで問題が一つ。この要人の側近には『八部集』の者が居るらしい。」

「！！…でもそれなら綾さんに頼めばいいのでは？」

「なんだ、やりたくないのか？」

やりたくない、といえば嘘になる。

「いえ、そういうわけでは…。」

「ならば決まりだ、詳細はまた後日連絡する。」

「……はい。」

建物を出て家へと急ぐ。

家に着いたら窓から自室に入り、布団にもぐりこみ、寝たふりをする。

深夜の仕事明けはいつもこんな感じだった。

はじめての大仕事（1）（後書き）

っとまぁ、こんな感じで地の文が少ないため、会話が中心で話が進んでいきます。

ごく平凡な朝

――ドッタッタッタ…バァン！！

部屋のドアが勢いよく開け放たれる。

壊れるからやめてくれというのだが、朝のこのときだけは必ずこうだ。

「お兄ちゃん！おっきろ～！！」

カーテンを開け、新鮮な朝日が寝ている者を容赦なく照らす。

だが慣れとは恐ろしいもので、最近はこの程度では目覚めないときがある。今日は目覚めたが。

「んっ・・・あぁ・・・。」

「おはよう、おにいちゃん。」

「あぁ…おはよう…じゃ、おやすみ」

さらに深く布団を被り、防御体制をとる。

正直なところもう目は覚めているので寝るつもりはないのだが、この手の攻防が楽しい日課になっている。

布団の暗闇の中で時間を確認する。７時過ぎか、５分１０分は余裕

がありそうだ。

いや、でも今朝は学校の前に綾さんとここに行こうと思うからそれなら…

「もーっ！お兄ちゃんがその気ならこっちにも考えがあるんだからね！」

右手にはお玉、左手にはフライパンを持ち、天高く掲げ

「秘儀！死者の――」

「待て待て待て！！そいつはダメだ！」

布団から飛び出し、両手を押さえつける。

押さえつけるまではよかったのだが…飛び出した勢いで押し倒してしまった。

「お兄ちゃん…／／／」

「わ、悪い…」

危ない危ない、俺があと2～3歳若かったら一線を越えてただろうな。

そんなことを思いつつ立ち上がり、マナミを起こす。

「じゃ、じゃあ下でご飯にしよっか」

「そうだな」

まだ顔が赤みを帯びている、可愛いなぁ。

下に降りるとすでに食事の用意はできていて俺の着席を待つだけであった。

俺は洗面所へ行き歯磨きを軽くしてから顔を洗い、それから食卓につく。

それから二人そろって合唱し、いただきます、と一声。

基本的に食事は弁当も含めてすべて真奈美の担当だ。

前に俺が作ったのがかなり不評で、それ以来俺が料理のために料理場に立ったことはない。

食事の前後にかけて報道番組を見ていたが、連日事件の報道は絶えることを知らない。

だが俺たちの活動が表沙汰になることは決してない。

おやっさんがいろいろ根回しをしているらしい。老婆心というやつだ。いや、老翁心か。

「お兄ちゃん、そろそろ行くよ?」

「お、もうそんな時間か」

一旦部屋に戻り、制服に着替える。

その後、薄っぺらいカバンを持って玄関に行く。

「よし、行くか」

「うん！」

そして俺たちは家を出、学校へ向けて歩き始めた。

ごく平凡な朝（後書き）

寝起きの口ん中ってすごく汚いから、食事前に歯磨きした方がいいと聞いたんで食事の前に歯磨きをさせてみました。

誤字脱字の指摘・感想等々お待ちしております。

登校、そして寄り道（前書き）

誤字脱字の指摘・要望・感想等々お待ちしております。
今回はあとがきも使っているので前書きに書きました。

登校、そして寄り道

家を出てからしばらく進むと・・・

「あ！マナ先輩、おはようございます！」

「おはよう、マナミちゃん。それから守君も」

「うぃっす」

マナだ。俺とは中学校からの付き合いで奇跡的に今までクラスがずっと同じだ。

ちなみに生徒会長をやっている。だが特別有能というわけでもなく、ごくごく『普通』である。

「ちょうどよかった、ちょっと俺用事があるんだけど、マナミと一緒に学校にいってやってくれんか？」

「生徒会の活動で先を急ぐから…ごめんね」

「なら仕方ないな。悪いな、時間とらせちまって」

やはり生徒会活動が入っていたか。能力面は普通なのだが、人を惹き付けるカリスマのようなものが滲み出るほどではないがあるらしく、いろいろと引っ張りだこらしい。

「ホントにごめんね。じゃ、また学校で！」

駆け足で去っていく後姿はどことなく申し訳なさと無念さを醸し出していた。

「ところでお兄ちゃん、用事って？」

「あぁ、それはな……はっ！」

マナミの目を見て気付いた。この目は女の目、中途半端な嘘をつけばたちどこに見破られてしまう！

「時間的には十分ウチに帰る余裕はあるけど、マナミと一緒だと何か困ることでもあるの？」

「まぁ…ちょっと…な。」

どうする？いっそのことマナミを連れて綾さんとこにいくか？でもそれだと込み入った話はできないからいく意味はないよな…。

「あれ？守センパイ！なにやってるんですか？」

助かった、マナミのクラスメイト達だ！…名前わかんないけど。

「いやぁ、ちょっとね。そだ、悪いんだけど、俺は用事あるからマナミと一緒に学校行ってくれない？」

「全然ＯＫですよ！行こ、マナミちゃん！」

「え、ちょ！？え！？」

クラスメイト達が空気を読んでくれたか半ば強制的に連行されていくマナミを見送る。達者でな、学校までの辛抱だから。

なにはともあれ、一人になることができたわけだ。

「それじゃ、寄り道するとしますか」

道を右に曲がり、学校とは違う方向へと歩みを進める。

――神社――

神社に着くと、巫女が一人掃除をしていた。

「おはようございます、綾さん。」

「あら、おはよう。朝からなんて珍しいわね、明日は大雨かしら?」

「そういうときだってありますよ。それよりおやっさんから聞きましたか」

「えぇ、なんでも側近の中に八部集の誰かがいるんですって?それが『龍』でないことを祈るわ。」

「龍、か…俺も相手にしたくないですね」

そもそも八部集とは『天』『龍』『夜叉』『阿修羅』『乾闥婆』『

迦楼羅』『緊那羅』『摩?羅伽』の8人からなる超人どもの集まりで、龍といえば天の腹心的存在、言うなればナンバー2である。

それに、よくは知らないが綾さんと龍には浅からぬ因縁があるらしい。

「それで、何か用事があるんじゃないの?」

「いや…綾さんと話して気を楽にしようってのが目的でしたから」

「あら、あなたにしては珍しいわね」

そりゃそうだ、なんてったって今回は必ず生きて帰れるという保証がない。だがそれでも確実に生きて帰らねばならないのだから。

「でも安心しなさい、生きてさえいれば治療してあげるから。それに火事場の馬鹿力って意外と侮れないものよ?」

『死神の妻』と恐れられる綾さんが言うと妙に説得力がある。きっとその火事場の馬鹿力に何度も苦しめられたのだろう。

「それはそうと、まだ時間はあるのかしら。あるんだったら、お茶でも飲んでいかない?いい茶葉が手に入ったんだけど」

「気持ちだけ受け取っときます。あまり時間的余裕がないんで…」

「…そう、残念ね。じゃあおみやげよ、受け取りなさい」

風呂敷に包まれた何かが投げ渡される。

「これは？」

「さっき言ってたお茶の茶葉を小分けにしたものよ。あなた教室に急須やら湯飲みやら置いてるんだから飲んでみなさい、おいしいから。」

ッ！？

今の言葉から、綾さんは教室に急須と湯飲みがあることを知っていた。だが、綾さんが学校に、ましてや俺の教室に来たことはない！

なのになぜ知っていたんだ？

「あら、どうかした？」

「いえ、なんでもないです。」

今深く考えるのはやめておこう、これは何かヤバい気がする。それに今すぐでなくともそのうちわかるだろう。

結局、大きな謎と茶葉を土産にもらい、俺は神社を後にした。

登校、そして寄り道（後書き）

守の姿が見えなくなってから暫くの後――

「アタシの存在を教えてもよかったんじゃないの？彼は問題ないと思うけど」

「時期尚早よ。今はまだそのときじゃないわ」

「前もそんなこと言ってたじゃない、そのときっていつなのよ？」

「いつかしらね、でもそう遠い先のことじゃないわ。」

転校生、来たる（前書き）

いよいよ二人の運命を狂わせる転校生が登場します

転校生、来たる

時間的余裕がない、と断ったのはギリギリに学校に行くのが嫌だったためで、実際チャイムの5分前に学校に着くことができた。

ざわざわ…ざわざわ…

なぜか今日の教室はいつも以上にざわついていた。

「なんだ、今日は抜き打ちのテストでもあるのか？」

とつぶやいた後、後ろから――

「ないよ。仮にそうだとしてこんなに知れ渡っておいて抜き打ちってのは意味ないんじゃない？」

と一声、誰だ、と振り返ると声の主は

「なんだ、陸か。」

こいつもマナと同じく中学のときからの腐れ縁だが6年連続同じクラスだったわけではない。いたかどうかなんて気にしないこともあったし。

「なんか今すごい失礼なこと考えてなかった？」

「全然。それより、テストじゃないとしたらこの騒ぎはなんだ？」

「今日編入してくる人がいるんだって」

「ほぉ、この次期にか、珍しいな。」

今は5月の終わり、学期の初頭とかならよくある話だがこの時期というのは初めてだ。

「で、どんな奴なんだ？」

いつでもそうだが、編入生となればこの話題に尽きる。

「知らない。クロムも知らないの？」

「知らん」

コイツだけは俺のことをクロムと呼ぶ。なんでも、元素のＣｒ（クロム）から取ったらしい。

「俺に聞かずとも、『あいつ』に聞けば一発だろう。」

噂をすればなんとやら、『あいつ』がちょうど近くを通りかかる

「おーい律っちゃん、編入生のこと知ってる？」

「もちろんよ。性別は男で、名前は真人って言うらしいわ。でも出身校以下他の情報は全て不明ね。」

「さすが律っちゃん！もうそんな情報を！」

新聞部の部長をやってるだけあって情報が早い。しかし、出身校が不明ってのはどういうことだ？

確かに、ウチの学校は俺やマナミの入学を許可している辺り普通の学校ではないみたいだから、前科（マエ）のある奴やその他訳有りの奴がいてもおかしくはないが。

「このくらいは朝飯前よ。それと、業務連絡なんだけど…」

律っちゃんが耳元でささやく。

「例の写真が手にはいったわ、それも結構な量よ。」と。

「そうか、また明日にでも買い取らせてもらう。しかしどうやって入手しているんだ？」

「簡単なことよ、アタシの手の者を遣わしているだけ。」

つまり、スパイを送り込んでいる、というわけか。どおりで上質な写真が撮れるわけだ。

キーーン、コーーン、カーーン、コーーン

「ホームルームを始めるぞー、席に着けー」

「商談は成立ってことでいいわね？期待してるわよ。」

そうして俺たちはそれぞれの席に別れた。

「もう知っているかもしれんが、今日からこのクラスのメンバーが一人増える。木下真人君だ。」

廊下から入ってきて、教卓まで歩く。彼の一挙手一投足にクラス中の注目が集まる。

「じゃ、木下君、自己紹介を。」

自己紹介といっても名前を言って軽く挨拶の言葉を述べただけで、律っちゃんの言った事以外の情報が得られることはなかった。

「じゃあ木下君、後ろに余った机があるから好きなところに机を動かして座ってくれ。」

彼が座ったのは一番通路側の列の最後尾、ちなみに俺は窓際の列の最後尾だ。

「それじゃ、連絡事項に移るぞ。　保健委員は今日の昼休みに…」

休み時間になると彼の周りには人だかりができていろいろ聞き出そうとあくせくとしていた。特に律っちゃんが。

ただ、何か収穫があったかというとそうでもなかったようだ。

授業の時間は教科書がまだ支給されてないから隣の人と共有するのかと思っていたが、すでに支給されていたらしく机をくっつけるという光景は見られなかった。

キ――ン、コ――ン、カ――ン、コ――ン

午前の授業が終わり、昼休みの到来を告げるチャイムが鳴る。それを合図に何人かの生徒は購買を目指して教室を飛び出していった。

編入生も友人だか野次馬だかわからないが一緒に飯を食う面子に事欠くことはなかった。

そんな彼をよそに俺はいつもの面子（マナと律っちゃんと陸）で机をくっつける。

「さてさて、待ちに待ったメシを…」

手をカバンの中に突っ込んで探すのだが、

ない　弁当がない！

ちょっと今朝の様子を思い出してみる・・・

・　・　・

あぁそうだ、マナミから貰ってなかったな。

「悪い、ちょっと下行ってくる。」

「どうせもどってこないんでしょ？」

どうせとは失礼なぶブン屋だ、買値を下げる口実にしてやろうか。

「いつものルートでいくの？」

「あぁ、近道だしな。食事前にほこりをたてるようで悪いな。」

「そう思うんだったらいかなきゃいいのに…」

「何か言ったか？」

「な、なんでもない！守君のバカ！」

「…変なやつ。」

そう言い捨てて下の階に降りた、飛び降りた、といった方が正しいかもしれない。

「いつ見てもすごいよね。窓から下の階に行くなんて、クロムにしかできないね。」

「守君しかしないよ、あんなことするのは」

「あれ、マナちゃん、なんか怒ってない？」

「べつに怒ってなんかない！」

絶対嘘だ、とは思ったが後が怖いのでそういうことにしておいて、

昼食を楽しむことにした。

――1年2組――

「よう、美味そうなメシじゃないか。」

「？あ、お兄ちゃん！」

颯爽と窓から侵入。しょっちゅうこうやって教室にお邪魔しているもんだから動きも慣れたものだ。華麗に着地を決め、流れるようにパソコン用の椅子に座る。

「守センパイ、どうしたんですか？」

「お恥ずかしいことに弁当を忘れてしまってね…ちょっとタカりに来たんだよ」

「ホントだー、マナミちゃんスゴいね」

「まぁね、伊達にお兄ちゃんと一緒に暮らしてないからね」

マナミがえらそうにふんぞり返る。そこから察する辺り、何か目的があると見た。

「用件は話しながらでもいいんだからさ…先に弁当くれよ」

マナミに弁当を催促する。が、マナミは苦笑いしたままだ。

「……まさか、忘れたってのは演技じゃなくてマジなのか。」

「てへっ、ゴメンね？」

ゴメンね？で済む問題じゃない！でもマナミだからお咎めは無しだ。もしマナミじゃなかったら、律っちゃんに協力要請して公開処刑しただろうな。

「かわりに卵焼きとご飯あげるから、ね？」

「じゃあ私はから揚げあげます！」

「私ウインナー！」

わいのわいの・・・

結局いつもの弁当と変わらない、いやそれ以上のご飯とおかずが集まった。

「案外何とかなるもんだなぁ…」

思わず感嘆の声を漏らした。

「ところで先輩、これからもココに出入りする感じですか？」

痛いトコを突かれる。確かに俺とマナミは兄妹だが、毎度毎度飯を食いに行くのはさすがに度を超えている。迷惑なのだろう、そのくらいの自覚はある。

「やっぱマズいよな、しばらくは自重するよ」

「あ、いえ！そうではなくて…」

違うのか？来るたびに「なんだまたアイツか」みたいな視線を感じることがあるんだがそれは気のせいか？

「ココで食べるのって意外と味気なくてつまんないの」とマナミが付け足す。

まぁ確かにそうだろうな。教室なんて学校に居るうちの大半を過ごすところだ、飽きもするだろう。

「で、他のところで食べるんだとして、アテはあるのか？」

「ないよ。だからおにいちゃんに探してきて欲しいんだ。」

「俺は使いっ走りか？3年なんだがなぁ…」

「それは私達も十分承知しています。でもこれは『真奈美ちゃんのたってのお願い』なんですよ、マナミちゃんの為ですからもちろん引き受けてくれますよね、セ・ン・パ・イ？」

「もちろんだ」

参った、そういわれると引き受けざるを得ない。しかしアイツは交渉が上手いな、前世でネゴシエイターでもやっていたのか？今度律っちゃんに身元を洗ってもらうか

「ところで、場所の候補地なんだけど…屋上はどう？」

食事どころといえば教室と食堂についで定番中の定番だ。ただ…

「屋上、いいですね！でも、屋上って・・・」

「不良たちの溜り場、よね」

よく知ってるな、どうやらネゴシエイターはバン記者もやっていたようだな。

「心配するな、俺が確保してきてやるから。」

「でも…」

「これでも俺、『治安維持局』の局長やってんだぜ？」

「治安維持局…？」／「…？」／「…！」

様々な反応が返ってきたが、どうやら治安維持局の存在や内容について知らないようだ。ネゴシエイターは知っているみたいだが。

「知らないならいいか、まぁ放課後にでも掃除にいくよ」

「お、おねがいします！」

皆一様にそういう旨のことを言う。ただ、マナミだけは暗くうつむき、不安を隠さずにいた。

「心配事でもあるのか？」と尋ねると――

「お兄ちゃんは負けないよね？絶対帰ってくるよね？」

「当たり前じゃないか」

頭を撫でてやる、するとマナミも嬉し恥ずかしといった感じでさらにうつむく。周りからは羨望の眼差しが注がれる。

「じゃ、昼休みも終わりに近いし、帰るな。」

行きとは違って階段で帰るため、普通に教室を出た。

――――廊下、帰途にて――――

マナミに強く念押しされてしまった以上、負けることは絶対に許されない……そんなことは万に一つもないだろうが。しかし今回は念には念を入れて、『奴等』に協力を依頼することにしよう。

そう思い、俺は自教室へと急いだ。

転校生、来たる（後書き）

奴等とは一体・・・？　次回は少しバトルが入ります。

それでは、誤字脱字の指摘・感想等々お待ちしております。

屋上掃討戦

奴等に協力を要請するため自教室に戻ってきた。マナミを怒らせて追い出されたんじゃないかと陸にからかわれたが、そんなのは無視して教室の一角でくつろいでいる二人組に声をかける。

「よっ。今いいか？」

「あぁ、構わんぞ。まぁ座れ」

座る許可がでた確認した上でイスに座る。クラスメイトたちは平静を装っていはいるが俺たちの会話に耳を傾けているのがわかる。

「今日はお前らに頼みたいことがあってきた。」

「内容次第やな。」

「屋上の掃除、別に俺一人でも構わなかったんだがマナミに圧をかけられてな、だから万全を期して望もうってわけだ。」

「ハギ、どうする？」

俺の依頼を受けるかどうかで話し込む二人。ちなみに関西弁っぽい方が萩（ハギ）でそうじゃない方が慧（ケイ）だ。こういう紹介の仕方は二人はあまり好ましく思ってないらしいがわかりやすいんだからしょうがない。俺とこいつらは違う中学なんだがそのときから何かと有名だったせいで高校の初日から親交があり、その結果、こんなことを頼める間柄があるのだ。

「待たせたな、その話乗るわ」

「助かる。お礼に今度飯でもおごってやるよ。それじゃ、放課後にいつもの部屋に来てくれ」

「なんだ、今からじゃないのか」

「時間制限がないほうがやりやすいだろ？」

「せやな、ほなまたその時に」

席を立ち自分の席に戻る。戻る途中、クラスメイトらから激励や応援の声がかけられる。屋上が使えないことに不満を覚えていた人も少なくないようだ。

キーーン、コーーーン、カーーーン、コーーーン

放課後、そしてここは局長室。俺は一足先に向かい、二人の到着を待っている。

ガラガラーー

戸が開き、二人が入ってくる。

「きたで。ほな行こか」

真ん中に俺、両側に二人という陣形で屋上へと進む。

「事前に集まるとは、お前もずいぶんと慎重になったな」

「言ったろ？万全を期するって」

階段を上っていき、存在しているだけで何の役割も果たしていない規制線をくぐると、次第に階段の隅には私物が増えていき、いかにもそれらしい雰囲気になってきた。

そして階段は終わり、目の前にはスプレーかなんかでマーキングされた扉。恨みはないがこの扉の向こうにいる奴等には力ずくでも明け渡してもらわなければならない。

すぅ…はぁ…　と深呼吸の後、

ドガッ！――――バダン

ドアを蹴り開け、ついに屋上に乗り込む。その先には・・・おるわおるわ不良どもが、ざっと数えたところ３０人はいるだろうか、それだけの視線が一気に集まる。やっぱり最初に目が行くのは両側の二人で、どうしてここに来たのか、そしてあの二人を従えている俺は一体何者なのか、といった事に動揺を隠せないでいるのが大半だがその中には――

「おぃ、真ん中のやつって『紅眼（あかめ）』じゃないか…？」

俺のことを知っているやつもいるようだ。

「マジか！？そんなやつが相手じゃ命がいくつあっても足りないぞ…」

「俺は逃げるぜ！」

「俺もだ！」

二人が逃げ出そうとしたその時――

ガスッ――ドゴッ

一人は足を払われ転倒し、もう一人は殴り飛ばされ鉄柵に激突し、そのまま気を失って動かなかった。

転倒した方を足で踏みつけて一言――

「敵を目の前にして逃げるとは、なってませんねぇ」

そしてストンピングをかまし、俺たちの目の前へ歩いてくる。どうやらこいつがこの取り巻きのリーダー格らしい。

「これはこれは、まさかこんな所にまで来られるとは…。ご足労おかけして申し訳ありません、先輩方」

深々と頭を下げる。妙に礼儀正しい奴だ、これも両側の二人の効力なのか？

「それで…何のご用でしょうか？」

「ここを使わせて貰いたくてな、悪いけど空けてくれんか？」

「それはできません。それにお二人も言ってたではありませんか、『欲しい物は力ずくで奪い取れ』と」

「せやったな。…ほな実力行使といかせてもらおか！」

「そうでなくては。それにあなた方は有名も有名、少数では勝ち目がないですがこの人数ではさすがにキツイでしょう？そして勝てばこの学校は私たちのものとなるのです！」

その言葉を聞いてあまり気乗りでなかったやつらもその気になり、指や首をポキポキ鳴らしたり、フットワークを始めたりしていた。

「ようしゃべるやっちゃ。せやけど、野心失わんゆうのはエエことや！」

ハギが動き出したのをきっかけに、二人も動き出す。ハギは右に、ケイは左、そして俺は中央へ――

「っしゃあ！楽しませてくれよ！」

一人が飛び出し、ドロップキックを放つ。

それに対して俺は間合いを計り右へ大きく踏み出し、その足でふんばって――

グシャッ

顔面に蹴りを入れる！もちろん相手はそれ以降ピクリとも動かない。

向こう陣営の驚きは尋常ではなかったらしく、次には全員が襲い掛

かってきた。左右では最初から全員がかりだったが。

サッ―ドボッ

先頭の奴の拳をしゃがんで避け、そのままの勢いで銃弾のうような正拳突きを下腹部にぶちかます！

サッ―ゴスッ　サッ―ドゴッ　サッ―バキッ

同様にかわしては一撃をいれ、またかわしては一撃・・・これだけで半分は片付いた。

「んなろぉぉぉ！！」

一人が首の辺りを狙ってハイキックを放つ、しかしそれを受け止めその足を軸に相手に向かってブン投げる！

ブゥン―ゴスッ

「がっ…」

一人に当たり、二人とも起きて来ない。これで残り三人だ。

「っらあぁぁぁぁ！！」

三人のうちの一人が俺を羽交い絞めにする。

「今だ！俺が動きを抑えてるうちにコイツを！」

「応！」

残りの二人が襲いかかる。まずは向かって右側の奴が俺の顔面に拳を振り下ろす！するとすかさず左側が拳を振り上げ揺れ動く俺の頭部を迎え撃つ！

「これでトドメだ！」

最後に羽交い絞めにしている奴が頭突きをかます！締めを解いていないので頭からのけぞる。

「どうだ…効いただろ？」

「その程度か？」

「なっ！？」

上体を起こし、羽交い絞めを力ずくで解き、お返しに腹に膝を入れる！相手の腰が浮く。そこを逃さず掴み、抱え込むように持ち上げ脳天から垂直に地面に叩きつける！いわゆるパイルドライバーだ。さすがに頭をコンクリに直撃させたら死んでしまいそうなので、頭とコンクリの間に俺の足を挟んでおいた。がそれでも結構な威力だ、１０カウントは楽勝でとれた。

「クソがぁぁ！！」

俺を挟み込んでいた二人が同時に走り迫り腕を伸ばす。クロス・ボンバーか！

迫り来る二本の腕をすんでの所でしゃがんで回避する。結果、お互いが相手にラリアットを決める形になって二人ともダウンしてしま

った。合体技って難しいな。

「これで俺に割り当てられた分は終わったな…」

周囲を見回すと・・・

「お、やっと終わったか」

「お前は前線を退いてからが長いからなぁ」

二人はすでに倒し終えていてその場にあったソファに堂々と座ってくつろいでいた。さすが二人は今でも活動をしているだけあって俺のように勘が鈍っていることはないようだ。マナミと同じ学校に通う間は迷惑かけらんないし、俺も勘を取り戻した方がいいかな…。

「んじゃ、俺はちょっと屋上を一周してくるな」

今回倒した奴らの顔を覚えておけばもしマナミがいるときに出くわしても追い払うことができそうだし、隠れている奴がいないかを探す目的も兼ねている。

出入口を司る建物の裏へと回り、二人の視界から外れたその時――頭を鈍い痛みが襲う！

「ッ！？」

一瞬意識が飛ぶ。次の瞬間には目の前に男が一人立っていた。

「さっきあなたを『紅眼』だといっていた二人がいましたが、彼らの勘違いでしょう？何せあなたの瞳の色は黒、間違っても紅には見

えません。つまり、あなたは『紅眼』の名を騙るニセモノ。私の尊敬するお方の名を騙るとはなんたる侮辱！」

俺の頭部を殴打したと思われる金属バットを高く振り上げる。もう一撃頭にもらうとさすがにもたないだろう。

「私があのお方に代わってあなたに裁きを下します！！」

バットが振り下ろされる。

――ガギィィン！

迫るバットに垂直に拳を撃ち出す！高い金属音を立ててぶつかりあい、その結果バットはへの字に曲がった。

「人を偽物扱いすんじゃねぇ！俺ァ本物だ！！」

本当は武器での不意打ちについても一喝してやりたかったんだが、このときはそこまで頭がまわっていなかった。

「で、ですがあなたは……！そ、その眼は！！」

「これで俺が本物ってわかっただろ？…それじゃ、寝てろ」

顔面と腹部に一発ずつ入れ、止めを刺した。

屋上掃討戦（後書き）

誤字脱字の指摘・感想等々お待ちしております。

屋上掃討戦、その後―（前書き）

意外と長くなったので、後書きにではなく次話としました。

屋上掃討戦、その後―

「無事か？」

音を聞きつけた二人がやってくる。

「おーおー、金属バットが曲がってらぁ。何をやらかしたんや？お前」

「ナックルで受けただけだ」

「よくやるよ。それはいいとして、お前この後妹ちゃんに会うんだろ？」

その予定だ。帰るときもできるだけ一緒に帰るというのが俺たちのルールで、用事等で一緒に帰れない時は必ず連絡をすることになっている。俺は屋上の相当で遅くなると伝えたところ、マナミも学内に残る用事があったので、ならば一緒に帰ろうということになったのだ。

「何か不満でもあるのか？」

「不満はあれへん。せやけど、お前いっぺん自分の頭さわってみ？」

言われたとおりにしてみると、手に何かどろっとしたものを感じた。血だ、最初の一撃によるものだろう。

「とりあえず顔洗っとけ。そんな血まみれの面じゃあ妹ちゃん泣く

ぞ？」

というわけで洗い流してきたのだが、怪我をしたと認識してしまったからか少々痛む。気にするほどではないが。

「だいぶマシになったな。傷もそう深いものじゃなかったから何日かすりゃ治るだろ。」

「破れ学帽被ってみんか？今なら似合うと思うで」

そんなもの、一体どこにしまっていたんだ？しかも形を崩さずに…

「俺は伝説の番長かよ、そんなのいらねえって」

「そら残念やな。まぁエエわ、ほな、ワシらは帰るで」

「あぁ、ありがとな」

彼らが帰った後は屋上にある不用品や私物の始末とちょとした片付けをしたところ、掘り出し物がざくざくと出てきた。まずはソファー、多少破れているが使用には問題ない。それからダーツセット一式・麻雀の牌も雀卓もある、今度あいつらと一勝負やるか。そしてなぜかエアコンがある、しかもそんなに古い型ではない。大方暑さ対策でどっかから入手してきたが電源がなくてそのまま放置ってとこだろう、ビーチパラソルもあるし。

その最中――

「うわぁ、こんな時間にこんなところに人がいるなんてびっくりだなー」

誰だ!?さっきの奴らの残党か!?

「おや、そこにいるのは守君じゃあないか」

聞きなれない声と見慣れない容姿から声の主が何者であるかはすぐにわかった。編入生だ。

「あぁ…真人っていったか?お前」

「転校初日だけど名前くらいはちゃんと覚えておいて欲しいね、この名前結構気に入ってるんだから」

「そいつは悪かったな。で、何の用だ?」

「何の用って…僕は校内を探検してたらたまたまここにたどり着いたんだ。だからここに用は――」

「ならさっさと帰れ。ここには――」

「ここになにもなくても、君がいたならそれで十分だよ」

互いに相手の言葉をさえぎって言う。それにしても、俺がいたなら十分?ということは俺を探して校内を散策していたというのか?

「聞きたいことがあるんだ」

「なんだ?手短に頼むぞ」

「これも可愛い妹のためかい？」

――！？

「その話、誰から聞いた！？」

「新聞部の人。さっき階段近くでばったり会ってね」

律か！アイツめ…少々お仕置きが必要なようだ。

「そんなに怖い顔しないで、彼女は悪くない。君のことは有名なんだから、いつかは僕の耳に入ることになる。それかたまたま転校初日だっただけのことだよ」

確かにコイツの言うこともっともだ。俺はその言葉で平静を取り戻した。

「確かにこれは妹のためだ。だが他人に、ましてや転校してきたばっかりのやつにとやかく言われる筋合いはない。」

「僕も君のすることにあぁだこうだ言うつもりはないよ。ただどうしても聞きたいことがあるんだ、『君はどうしてここまでできるんだい？』」

『どうして』だと？愚問だ、そんな質問の答えなど決まっている。

「そりゃ可愛い妹のためだからだろうが」

「じゃあ君はその可愛い妹のためだったら命も投げ出すというのか

い？」

「その通りだ。俺は皆とは鍛え方が違うから多少のことではくたばらないだろうがな」

それにお前も普通の人とはちょっと違うようだが、と続けようとしたがやめた。時期外れの転校生なんだから相応の事情があるのだろう、うかつに地雷原を歩くようなことは得策ではない。

「彼女が悪に堕ちるとしてもそれに従順なのかい？」

「止めはするだろうが、最終的にはそうだろうな。だがそれはないと思うぜ」

俺の勘が正しければマナミは悪ではないものの、世間的には良しとされないことを経験しているからな。そういえば、マナミが義妹になるちょっと前から正義さんと会ってないけど元気にしてるかな？

「それじゃ……」

「…！、質問受けは終わりだ。俺は帰る」

まだ聞きたいことはあったようだが途中で打ち切った。校門へと歩くマナミの姿が見えたからだ。

「じゃあな」

階段を駆け下りてマナミの元へ急いだ。

・

・・・・・

――しばらくの後

「・・・もしもし。僕です。黒武者守と接触しました。・・・・・確かに『龍』さんの仰るだけのことはありました。ただ、彼が僕たちの脅威になるかどうかは、やっぱり直接拳を交えてみないとわかりかねます。・・・・・わかってますよ。大丈夫です、まだバレてません、僕もプロですからね。・・・・・はい。それでは、失礼します」

時を同じくして――

校門に着くと、マナミが辺りを見回しながら落ち着かない様子で待っていた。

「待ったか？」

「全然！マナミも今来たところ」

「それじゃ、帰るとするか」

「うん！」

手をつなぎ、接近した状態で帰る。傍からみれば恋人同士に見えるだろうな。行きは寄り道したが、帰りはどこにも寄り道せず家に直

帰する。道中、出血がバレないように定期的にタオルで汗を拭くフリをして血を拭う。今日持ってきてたタオルの色が濃い眼で助かった。

屋上掃討戦、その後―（後書き）

誤字脱字の指摘・感想等々お待ちしております。

【お知らせ】

・主要キャラがもう少し出てきたら一度キャラ紹介のようなものをやりたいと思っています。

・８・９月はＰＣ環境のない実家に帰るのでおそらく更新できないです。

はじめての大仕事（2）

「ただいまー！」

帰宅してまずは二人とも一度私室へ行って制服から着替える。その後リビングに降りる。

「さて、今日の晩飯はなんだ？」

「んー、何にしよっかなー…」

冷蔵庫の中の食材とにらめっこをするマナミ。食材はたいていのものが十分量そろっているので作ろうと思えば文字通り何でも作れるのだ。

「お兄ちゃん、何が食べたい？」

「何でもいいのか？」

「もちろん」

「んー…じゃあ、から揚げがいいな」

「うぇ～、またから揚げ？この前食べたばっかじゃん」

「好きなんだからしょうがないだろ、ダメならシェフのおまかせでいいよ」

「お、お兄ちゃん…／／／」

マナミはなぜか頬を赤らめる。今の会話の中で紅潮する要素はなかったと思うが・・・。

「ん？どうした、具合でも悪くいのか？」

「…っ！な、なんでもない！！」

そういって冷蔵庫から食材を取り出そうと手を伸ばす。がしかし取り出したのは牛肉、普通から揚げは鶏だろうよ。

その後もマナミは俺と目をあわせないようにしていた。何かまずかったか？

食後は自室で勉強とみせかけて、今日の仕事の内容のおさらいをする。

事前に配布された資料によると、今回の目的は『とある要人の暗殺』で場所は郊外にある屋敷、対象の死亡を確認した後に屋敷近くの空き地にまで移動しそこで回収、と…。他にも屋敷の間取りや侵入経路の確認も怠らない。

―コンコン、ガチャ

「お、お兄ちゃん・・・その・・・お風呂、空いたから入ってね」

突然の来訪に驚いたが、マナミはそういっただけでそそくさと自分の部屋に戻っていった。思春期の女子ってのはよくわからん。

「とりあえず、冷めないうちに風呂でも入っておこうかねぇ」

風呂場に行き脱衣所で服を脱ぎ鏡を見る。筋骨隆々、とまではいかないがガタイはいい方だろう。鍛え上げられた体には所々に傷跡が残っている。

「この手の傷も最近はあまり増えなくなってきたなぁ」

働き始めたころの俺はひどいもので綾さんが手を施してくれていなかったら、たとえ残機が増えるキノコがいくつあっても数が足りなかっただろう。

階層はこのくらいにしておいて、風呂に入る。風呂の時でもそうでないときでも同じなんだが、時々誰かに見られているような感じがする。もうすでに『八部集』に目をつけられているんだろうか？しかし俺自身には何も影響を及ぼさないので今は無視の一点張りだが。

そんなこんなで風呂を上がる。これまでの時間は１０分少々でマナミにはいつも短いだのカラスの行水だの言われるのだが、今日はさっき部屋に閉じこもって以来一向に出てくる気配がない。

心配になったのでマナミの様子をうかがうと、まだ１０時前後だというのに照明を消してベッドに突っ伏している。屋上の一件で結構な気苦労をかけてしまっていたのだろう。だが今の俺にとっては好都合で、この隙に着替えてこっそり家を出、おやっさん達のもとへ向かうことにした。

「おぉ、早かったな。まだ来ないものだと思っていたが」

俺を見かけたおやっさんが少し驚いた様子で話しかける。

「マナミが早めに寝てくれましてね」

「…そうか、我々が原因でなければいいのだが。ともかく、作戦開始の時刻を予定よりも早くできたのは大きい」

おやっさんは俺達兄妹のこと、特に俺のことについてはかなりブラックな部分まで知っているので俺に最大限の配慮をしてくれる。今回の作戦も、俺が到着し次第決行する手筈になっていたのだ。

「何があろうと必ず生きて帰還するんだ」

「わかってますよ。なんせ家では真奈美が待ってますからね」

出発直前におやっさんと会話を交わし、出発する。時刻は１１時過ぎ、屋敷は郊外にあるため外はすでに真っ暗であるが出入口となる門だけは灯りが灯っていて、屈強そうな男が警備をしている。だが今回はそこからではなくて〝裏口〟から入ることになっている。情報によると、外壁の一部が回転扉のようになっているそうだが、目印はない。要は自分で片っ端から壁を押して探せということだ。

「この辺の事前の調査をしておいてくれたら少しは楽になるのになぁ」

なんて愚痴をこぼしながら、俺は壁を押していく。

押せども押せども一向に正解にたどり着けない。嫌気がさしてきたその時――

ゴゴゴ…

壁が動いた。幸運なことに正解にたどり着いたようだ。そこから中に入り、扉の位置を覚えておいてもとに戻す。先に進もうとすると、何者かが待ち構えているのが見える。

「過激団が関係しているってのは本当だったか…」

待ち構えていた者たちの正体は量産型兵士、いわゆるクローン兵だ。誰をベースにしているかは知らないが。過激団は人手を必要としているところにコイツらを派遣して金を稼ぐセコいビジネスもやっている。

「『八部集』の誰かさんと一戦交える前に軽くアップでもしときますか！」

一気に距離を詰める。向こうもこちらに気付き、一気に散開して俺を包囲する。そして中心の俺に向けて一斉に殴りかかる！さすがはクローンなだけあって波長もぴったりだ。屋上での不良どものそれとは次元が違う。だが所詮は雑魚兵、さしてダメージはない。

「効かんな！」

両腕を伸ばして自転する。それだけで包囲網は解けてしまった。すかさず屋敷の本館に向けて歩みを進める。行かせまいと後ろから一体の量産型が延髄切りを放つ！

俺はその足が延髄にヒットする前に掴み、前方に放り投げる。そしてそのまま――

――グシャッ

顔面を地面の凸凹と同じように踏み越えて、むしろ強く踏みつけてさらに先に進む。どうせこいつらはクローンで無限にいるんだから殺したって構わないだろう。だから俺はこいつらだけは殺すことを躊躇わない。

ある程度進んだところで反転し、こいつらと向かい合う。奴らのうちの一体が俺に飛び掛かる！俺も飛び上がり、相手の腹に膝を入れる。体制が崩れたところで重心を移動させて上位になり、そのまま落下し相手を下敷きにして着地する。着地時に骨の砕ける音がする、こいつはもう立ち上がれないだろう。

ほかの一体が俺に向かって突進してくる。俺はそれをかわし、お返しに拳をぶち込む。相手は後退し、膝を土地につける。すかさずそこにシャイニングウィザード！一丁上がりだ。

すぐさま近くのやつに接近し、脛をバット折りの感覚で蹴る！バットが折れるくらいだ、人の足も簡単に折れてしまう。相手がのけぞっているうちに顔に手を置き、地面に叩きつける様に押さえつける。その途中で相手の首は俺の脚に当たり止まる。だが押さえつけるのは止まらない！結果、相手の首はあらぬ方向に曲がってしまった。

そのまま前方へ駆け出し、二体の首を掴み締め上げる！二体ともしばらくは振りほどこうと抵抗していたが次第に弱くなり、とうとう動かなくなった。

「これで全部片付いたな」

屋敷の中に入り、要人の私室へと進む。しかし・・・

「なんだこの屋敷は？警備のものが誰一人としていないじゃないか」

それから先に進むが、やはり誰もいないし現れない。確か資料では各種武装をした警備の者がいるはずなんだが…

予想だにしない事態に戸惑いながらも目的の私室へと進む。私室に近づくにつれ、何か聞こえるのに気付いた。さらに進むにつれてより鮮明に聞こえてくる。これは、人の叫び声、それに銃声…？

自分以外に同業者がいる！人がいないのはそっちに人員を割いているからだ！

そう判断した俺は廊下を走る！そして私室についた頃にはもう音はしなくなっていた…。そしてその私室には扉がなかった、正確には吹き飛ばされてなくなっていた。中を覗くと警備の者らしき人が数人横たわっており、高級そうな絨毯を紅く染めていた。

部屋の中央では男が誰かの頭を掴み上げる様が見えた。月明かりからかすかにわかる風貌からして、掴まれている男が例の要人とみて間違いない。獲物は渡すまいと男のもとへ駆け寄るが間に合わず、要人の頭から吹き出す生暖かい血の雨を浴びるだけであった。

はじめての大仕事（2）（後書き）

次はボス戦です

誤字脱字の指摘・感想等々お待ちしております。

（追記）７／１０　八部集が八部衆になっていたので訂正しました

はじめての大仕事（3）

二人が対峙する。先に動いたのは、相手を倒し手柄を奪うことを考えた俺だった。

相手に向かって猛進し、渾身の一撃を放つ！しかしあっさりといなされてしまう。だがすぐに腰をねじって相手を視界に捕らえ防御体制を取ったおかげで反撃は防ぐとこができた。

普通の相手ならここまででターン終了なのだがコイツは違った。すぐさま俺の腕をつかみ、壁へ投げ飛ばす。壁までの距離は短く、俺はなす術もなく壁に打ち付けられてしまった。

「がはっ…！」

衝突により血反吐を吐く。その隙を逃すまいと相手は前蹴りを放つ！すんでのところで躱し、お返しにカエルアッパーをお見舞いする！

「ぐぉっ…」

俺の反撃は顎部に当たり相手はのけぞる。普通なら脳震盪で意識を失うんだが、さっきの行動といい打たれ強さといい、並大抵の人間ではない。

アニメでよくあるような拳打の応酬を繰り広げながら考える。

もしや、コイツが『八部集』の一人？――

そう考えたがもしそうだとするとコイツが雇い主である要人を殺したことの説明がつかない。じゃあ一体何者なんだ!?

「どうした?何か考え事か?」

「ッ!?」

直後、相手はサマーソルトキックを放ち防御体制が崩される。俺が再度防御体制をとるよりも早く相手は着地し、がら空きの胴に掌打を打ち込む!

「っぐぁ…!!」

モロに喰らった俺は壁まで吹っ飛ばされ、受身を取ることもままならず壁に直撃する。奇跡的に意識と四肢にたいした被害はない、その分内臓のダメージは計り知れない。現に立つ事さえままならない。

そんな時――

（・・・力を貸してあげようか?）

まいったな、幻聴まで聞こえ出した。どうやら結構ガタがきてるらしいな。

（幻聴とは失礼ね。まぁいいわ、このままだとアナタは確実にあいつに殺されてしまうわ。そうなってしまったらマナミちゃんともお別れになるのよ？それでもいいの？）

お前は何者だ、そしてなぜマナミのことを？

（そんなことは今はどうでもいいの。それより騙されたと思ってアナタの体を貸してくれない？）

悪い話ではない。こんなところでくたばるわけにはいかない。生きて帰れるのであれば悪魔に魂を売ってやろうではないか！好きに使ってくれ。

（契約成立ね。それじゃ、遠慮なく。あと、アタシは悪魔じゃないから安心してね。）

幻聴だと思っていたそれは幻聴ではなかった。立ち上がることさえできなかったはずなのにすっくと立ち上がる。相手もこちらに気付き

「……さっきので仕留めたとと思ったんだが、それを耐えたどころかまだ立ち向かおうとするとはな。こいつは楽しみだ」

ゆっくりと手を打ち合わせながら言う。そして手を止めてさらに言葉を続けた。

「お主の名を聞かせてもらおうか」

おおと…

「生憎だが、貴様らに名乗る名など持ち合わせてはいない」

どうやら、発言権さえも奪われてしまっているようだ。こうなってしまっては最早傍観者に徹するほかない。

「よかろう。ならばその名、力ずくで聞くまでよ！！」

今度は相手が先に仕掛けてくる。だがさっきまでよりも速い！

「そうでなくては！」

相手の攻撃を一つ一つ正確に処理する。俺なら2・3発は貰ってるだろうな。

しばらくの間拳のやり取りがおこなわれる。しかし反撃に出ることは一向になく、防戦一方の展開が続く。

「どうした、守るだけでは私には勝てぬぞ？」

「それじゃ、遠慮なく」

その直後に放たれた相手の左を受け止め、その腕を伝って肉薄し首筋に手刀を振り下ろす。動きが止まった一瞬の隙に相手を引き倒し、倒れてくる相手の背中を膝で迎え打ちさらに肘で追い打ちをかける。さらにその肘で相手を押さえつけ、もう片方の手で鳩尾を正確に突く！

「っはぁ…！」

さすがに最後の一撃は効いたようだ。しかしすぐに立て直し、体をねじらせ俺の押さえをほどき一度距離をとるもすぐにまた接近してくる。加速状態からの強烈な一撃がくると思った俺は防御体制をとる。すると相手が不吉にニヤリと笑った。

――これはさっきのサマーソルトと同じ流れじゃないか！

そう思ったときにはもう遅い、相手は減速しサマーソルトキックを放つ。すると今度は俺がニヤリと払った。

まさかアイツはこれを見越して――！？

俺の読みは正しかった。俺は少しのステップと回転で攻撃をかわし、回転の遠心力も加わった蹴りを相手にブッ放す！

「があっ…！」

相手は壁の辺りまで吹き飛ぶ。相手は持ち直した後に構えを解き―

「益々興味が湧いたぞ、お主」

俺もだ。自分自身が普通じゃないことはわかっていたがここまでの能力を秘めているとはな。

「白黒はっきり付けたかったのだが今日はここまでだ。そいつの首はおぬしにくれてやろう。」

（逃げる気か、追うぞ！）

（馬鹿いわないで、無理よ）

「私は『八部集』が一人、夜叉だ。いずれまた相見えることになるだろう、さらばだ」

そういうと夜叉は窓から部屋を出て行った。あとを追うのが無理というとこは今になってわかった。さっきまで俺を動かしていた声の主はすでに俺の体の操縦権を放棄していて、これまでのすべてのダメージを一度に受けたからだ。走ることなどできるはずがなく、おやっさんの待つ回収地点まで痛みを堪えながら進まなければならなかった。

――神社の本堂――

「ただいま。行ってきたわよ」

「おかえり。それで、どうだった？」

「素質は最高級ね。今までに例を見ないくらいのものを持っていたわ。ただ、本人は使いこなせていない感じだったけど」

「やっぱりそうなのね。ねぇ、彼がその力を使いこなせるようになるにはどうすればいいと思う？」

「悟りを開いて明鏡止水の域に達する、とか？」

予想通りの答えに笑う。そしてさらに言う―

「普通はそうよね、でも彼は違うと思うの。あくまでも私の推測に過ぎないけど彼の場合、鍵となるのは妹よ。」

「なるほど。たしかに彼に妹とお別れになるって言ったらすんなり体を貸してくれたわ」

「でしょ？もしも妹が実害を被るようなことになれば、きっと彼は最強の状態になるわ」

「それはさぞ楽しいことになりそうね」

「内輪で押さえようとするとしたら相手をするのは自分よ、わかってるの？」

「もちろんじゃない、。あぁ、考えただけでもう…！」

「はいはい、そこまでにして頂戴。ところで…」

さっきまでは笑ったりもしていた顔が一気に真剣実を帯びる。

「そこにいたのは『龍』だったの？」

「いえ、『夜叉』よ。」

そう聞くとさっきまでの真剣な顔はどこかへと消えていった。

――屋敷近くの空き地――

歩きたくないと訴える体に鞭打って回収地点にたどり着くと、暗闇に完全に同化した車が一台とおやっさんがいた。

「ん、来たか。よもやゾンビではあるまいな？」

「ちゃんと生きてますよ、死に掛けてますが」

車に乗り込み、横になる。車は俺を治療するために綾さんの神社へ

向かっている。

「しかし、これで君も一躍有名人だな」

「有名人？俺が？」

体はボロボロでも口と脳は元気なようだ。そういえば目的の要人は結構な大物だって言ってたな。

「要人が大物だったことも大きいがそれよりもあの『八部集』と戦って生き延びたことだ。きっと彼らと同等の強さを持つものとして知れ渡るだろうな。広がっていくのも時間の問題だ、どうにもとめられんよ」

「・・・・・」

「やはり妹が心配か？」

「それもあります。でもマナミはどんなことがあろうと守ってみせますよ。それにいつかはこうなるだろうって思ってましたから」

「それは頼もしいな。だとしたら何を悩んでいたんだ？」

「あの屋敷で『夜叉』と闘ったんですが、まるで歯が立たなくて…」

「なるほどな。強くなりたいか？力が欲しいか？」

「……！」

はっきりとした記憶はないが、そんな風なことを昔誰かに言われた

ような気がする。でもどう頑張っても思い出せない、デジャヴだろうか？

「どうした？」

「あぁ…すみません。ちょっとボーっとしまして」

「その容態では無理もない。着くまで休むといい」

「…そうさせてもらいます」

そうして俺は少しばかりの間睡眠と休息の世界へと落ちていった

「着いたぞ、起きろ」

おやっさんに起こされる、マナミがいつも優しく起こしてくれているからなのか俺の体がボロボロだからかわからないが痛い。だがおかげで眼も冴えた。車を降り、おやっさんと二人で本堂へと歩いていった。少しとはいえ休んでいたため動きやすかった。

「来たわね。こんなことになるだろうと思って治療の用意をしておいてよかったわ」

本堂に着くともう準備はできていて、あとは俺が横になるだけだった。事前に相談に行ったのがこんな形で功を奏すとは思ってもみなかった。

「しかし派手にやられたわね。ところでこの頭の傷は何かしら？この傷だけちょっと治りかけてるんだけど」

「あぁ、それはこの一件とは違うところでの傷です。ちょっとバットでやられましてね」

「ついでだから一緒に治療しておくわね」

綾さん自身は治療といっているが、どちらかといえば神通力のような力による治癒の方が正しい。そのため、そのうち一粒で全快になるような豆の栽培を始めるんじゃないかと密かに期待している。

「それにしてもよく夜叉と闘って帰ってこれたわね。『天』と『龍』に次いで強いといわれてるのに」

「今回の標的が俺ではなかったからじゃないですか？向こうもそんな風なこと言ってましたし」

「だとしたら、とんだ強運の持ち主ね」

「運も実力のうちと言うじゃないですか。ところで、相手が夜叉だって言いましたっけ？」

一瞬、綾さんの表情が凍りつく。しかしすぐにいつものようになって

「そのくらい調べればすぐにわかるわよ。甘く見ないで頂戴」

おかしい。あの場面で生きていた第三者などいたはずがない。もしいたら夜叉が感付いていたに違いない。となると考えられるのは夜叉と綾さんがつながっていたか、もしくはあの霊体と綾さんがつな

がっていたかだ。ただ、今俺の命は綾さんの掌にある。不用意な言葉でまた死に掛けるのは御免だから考えるだけにしておいた。

「その夜叉とやら、もしかしたら君を試していたのかもな」

「おやっさん、どういうことです？」

「『過激団』には世界征服や何かに対する復讐といった全員がまとまるような要素はない。まぁ中にはそういう奴もいるかもしれんが…。他にもただ強い敵と闘いたいという奴もいる。夜叉は恐らくその類だったんだろう」

「…というとことは、俺はその力試しに合格した、と？」

「恐らくね。あなた、自分では気付いていないでしょうけど、潜在能力は折り紙つきよ」

「そんな、綾さんまで…」

こっちの世界で名を馳せている綾さんにそういわれるとまんざらでもない。だがこれまで一度もタッグを組んだ事がないというのは、まだそれには及ばないということなのかと考えるとちょっとへコんでしまう。

「それはそうと、治療終わったわよ。しめて五万九千八百円ね」

「え〝っ！金取るんですか！？……じゃあ報酬から天引きしといてください」

「冗談よ、冗談。今はお金には困ってないから」

「今回はタダということだが、そうでなかったとしても心配は要らんぞ。金のことで困ったらいつでも言ってくれ、手配するからな。」

「じゃあもしものときはお願いしますよ」

正直今のところ家計は厳しいわけではない。贅沢をしても多少の余裕があるくらいだ。だがこの先どうなるかはわからないから本当に困ったときは頼らせてもらうことにしよう。

「じゃあウチの神社にいくらかお布施を…」

「おいおい、さっき金には困ってないといったじゃないか」

はやり駄目ですか、と続き三人は笑った。とても大仕事をやり終えた後の光景とは思えなかった。

はじめての大仕事（3）（後書き）

またしばらく日常ｐａｒｔが続きます。

お読みになって頂きありがとうございました
誤字脱字の指摘・感想等々お待ちしております。

仕事明け

おやっさんの車で家まで送ってもらう。時刻は午前４時ごろ、東の空がうっすらと明るくなっている。
毎日ではないから良いものの、やはり次の日には若干支障をきたす。
今日の化学の授業は寝ようかな。

家に着いたら秘密のルートから部屋へと戻り、何事もなかったかのように寝る。
これ以降は平凡な日々と何ら変わりはない。起こされて、朝食をとって、その他諸々の末、家を出る。
昨日と違うのはちゃんと弁当を持っているかの確認をしたことくらいか？あ、あと寄り道もせずまっすぐ学校に向かったことだ。

――学校への道中――

「で、場所を確保したわけだが、さっそく今日から上で食べるのか？」

「うえ？」

「屋上のこと、昨日のうちにある程度片付けておいたから今日から使えるぞ」

「ホント！？じゃあ今日から屋上で食べる！」

そう言って携帯を開き、一緒に昼食をとるメンバーにこのことを伝えるメールを作成する。マナミの喜ぶ姿が見れてこちらもうれしい。

「歩きながら携帯いじるな。前方不注意だぞ」

「だいじょーぶ、だいじょーぶ。この通りはあんま車走ってないし」

――ドンッ

「きゃっ」

だからいわんこっちゃない。しかもよりにもよってガラの悪いのにぶつかって…

「ご、ごめんなさい！」

真っ先に謝るマナミ。ただそれを向こうが許すはずもなく―

「ごめんですむわけねぇだろうが！あーあ、これは完全に骨が折れてらぁ。治療費と慰謝料払ってもらおうか」

「そ、そんな…」

ぶつかった本人は体の一部を痛そうに押さえている。だがもちろん骨折なんてしてるはずはない。
こういうやつらがよくやりそうな手口だ。しかしマナミを相手にやったのが運の尽きだな。

「まあまあ、その辺にしといてやれよ」

と俺が仲裁に入るとすぐに噛み付いてきて

「ぁんだテメェは!?コイツの代わりに払ってくれんのか?」

「あぁ」

「お兄ちゃん…」

「はっ、優しいお兄様なことで!それに免じて金はいらねぇよ、そのかわり…」

「そのかわり?」

「コイツと同じ目に遭ってもらおうか!」

――ドカッ、バキッ、ボコッ

「えーっと、さっきなんて言ったんだっけ？」

「な、何も言ってましぇん…」

「じゃ、これは治療費と慰謝料な」

そう言って相手の懐に封筒を入れる。治療費が見事に役に立ったわけだ。

「ったく…こんな目に遭うんだから、次からは気をつけろよ」

「はぁい…ぁイタッ！」

お仕置きに頭を軽く小突く。マナミは両手で叩かれたところを押さえるがその仕草もまたイイわけで…

「お兄ちゃん、聞いてる？」

「えっ！？わ、悪い、聞いてなかった」

「もぉ～、ちゃんと聞いててよね。みんなからＯＫの返事が来たから今日から屋上で食べることに決まったから」

「了解。迷子にならないように迎えに行ってやろうか？」

「い、いらない！迷わず行けるもん！それにみんなもいるんだし…／／／」

それもそうか。みんなの前で兄に連れて行ってもらうなんて情けない真似はできないよな。

―校門―

「おはようございまーす」

「おはようございます」

「あっ、見てお兄ちゃん！今日もあいさつ運動やってるよ」

「みたいだな。朝からご苦労なことで」

あいさつ運動は風紀委員会が不定期にやっていることで、朝校門に立って来る生徒来る生徒にあいさつをする。

俺は風紀委員会から目の敵にされてるから正直ない方が嬉しい。活動してるときは遅刻のチェックも厳しいし。

「おはようございます」

「おはよ～ございま～す！」

風紀委員のあいさつに対して元気いっぱいのあいさつを返すマナミ。その一方で・・・

「おはよ、っ……！」

俺の姿を見た途端に大抵の奴らは睨みつけてくる。相変わらず凄まじい嫌われようだな。

「あら、おはよう」

「あぁ、オハヨウゴザイマス」

唯一俺に挨拶をしてきた彼女が風紀委員長のユキちゃん。親父さんがサツの偉い人で、そのせいか責任感が強く規則に厳しいことで有名だ。

そんなもんだから苦手にしてる人もいるが「もっと指導されたい！」とかいう物好きもいて、意外と支持層は厚いらしい。

「あら、今日は遅刻しなかったのね」

「現行犯で逮捕できなくて残念だったか？」

よくわからんがユキちゃんは『逮捕（指導）は現行犯で！』というポリシーがあり、現場を押さえられない限りは捕まることはない。ちなみに、現場を押さえられても逃げ切ることができたらチャラになる。

俺も何度か現場を押さえられたが、その都度うまく撒くので捕まった例がない。言うなれば俺とユキちゃんの関係はあの世界的大泥棒とＩＣＰＯの警官と同じような関係だ。

「そうね、確かに残念だわ。でも、あなたが更生したって言うんだったらもっと嬉しいわね」

「馬鹿言え、誰が更生するか」

二人の間で目線が火花をあげてぶつかり合う。このピリピリとした空気には誰も割り込めなかった。

「こんなことでいがみ合ってもしょうがないわ。それより、ちょっと妹さんを外してくれない？あなただけに話があるの」

「俺だけに？…ふん、いいだろう」

さっきまで厳つい顔をしていたお兄ちゃんがマナミの方を向く。でもその時のお兄ちゃんはいつものやさしいお兄ちゃんの顔だった。

「マナミ、悪いんだけど…俺は用事ができたから先に行っててくれ」

「りょうか～い」

マナミはお兄ちゃんと分かれて、一人で教室まで行く。お兄ちゃん、ユキ先輩と仲が悪いみたいだけど大丈夫なのかな…

「これでいいか？」

マナミが十分離れたことを確認して言う。

「悪いわね。兄妹水入らずの一時を奪ってしまって」

「前置きはいい、用件はなんだ」

「そんなにカッカしないで、別にあなたを捕まえようとしてるわけじゃないんだから。本題に入るけど、末高（マッコウ）の話知らない？」

「末高？その手の話ならハギやケイにしよろ」

末高ってのはこの辺りじゃ横道高校（通称：外道高）と双璧をなすガラの悪い学校だ。

元々末高ってのはあだ名で、世紀末みたいな奴らが多いからそう呼ばれたんだとか。

今となっては本来の名前を知るものは誰もいないが。

「あとでするわよ。『治安維持局局長』はまだ何も関与してないのね？」

「あぁ、何もしてねぇよ。」

「そう、ならいいのよ。最近末高の生徒が周辺の高校を襲撃しているらしいの。だから変に喧嘩吹っかけたりしてウチの学校も襲撃されるなんてことのないようにしてちょうだい」

「へいへい、了解」

ユキちゃんの束縛から解き放たれた俺は、自分の机に突っ伏して小休止をとっていた。

「やぁ、昨日はすごかったらしいね」

話しかけてきたのは真人、向こうから話しかけてくるとは意外だった。

「屋上（アレ）のことか、そんなにすごいことじゃないぞ？」

「いやいや、すごいに決まってるじゃないか！『あの人』と闘ったんでしょ？タダではすまないよ、普通」

あの人ってのはおそらくリーダの奴のことだろう。アイツってそんなに名の知れた奴だったのか・・・

「お前でも知っているあたり、俺も少しは名が売れたのか？」

「そうだね。それにこれからは気をつけたほうがいいよ。いつ・どこで・誰が君を狙っているかわかったものじゃないからね」

「ご忠告どうも」

それだけを言うと彼は自分の席に戻っていった。

前言通り化学の授業を寝て過ごしたため、あっという間に昼休みが訪れる。俺は足早に屋上へと向かう。

「あ、来ましたね先輩。席はあっちです」

ついてすぐに席に通される。俺の座る席にはいかにも女子のものらしくかわいらしい座布団が敷かれていて、その上に『兄』と書かれた紙が置いてあったのですぐにわかった。ちなみに隣にはマナミが座っていた。

「週一かそこいらで席替えをしようと思うんですけど、先輩とマナミちゃんはペアで移動してもらいます」

「そうなの？俺としては別にかまわないけど…、マナミはいいのか？」

「マナミちゃんはセンパイの隣がいいってごねて聞かなかったんですよ」

「ちょ、ちょっとサキちゃん！」

マナミが顔を真っ赤にしながら言う。

「俺はうれしいぞ、マナミ」

「お、お兄ちゃん…／／／」

「あの～先輩？マナミちゃん？ラブコメってないでこっちに戻ってきてください」

「おっと、そうだったな　悪い悪い」

「それじゃあメンバーも揃ったことですし、食べましょ！」

食べているときもゲスト兼功労者の俺をもてなそうとあれよこれよと話に花が咲く。

「そういえば、先輩のクラスに転校生が来たらしいですね。大丈夫ですか？」

「大丈夫って…何を心配してるんだ？」

「こう…『今日からこのクラスは俺のものだ！このクソッタレどもがぁ！』的な？」

「そんな展開あるわけないだろ、漫画の読みすぎだ。まぁ仮にそうだとしても、俺はそんな簡単にはやられないから心配しなくても大

丈夫だっての」

「でもその転校生は先輩と反対側の席らしいじゃないですか。何か対抗意識的なものがあるんじゃないですか？」

「ちょっと待て、転校生の存在はともかく、どうしてそこまで知っているんだ？」

考えられる可能性は一つしかないが、一応聞いてみる。

「律先輩の記事ですよ。これが昨日発行されたやつです」

手にとって記事の内容を見てみると――

『三年六組に時季外れの転校生来たる！！』

と見出しの打たれた記事がトップで掲載されており、内容も事実をありのままに伝えていた。

…ただ一点を除いて。

『彼は黒武者守の近くの席が空いていたにもかかわらず、あえて彼とは反対側の席を選んだ。
しかし転校生は時々彼の様子を気にかけているようであった。これは二人には浅からぬ因縁があるものだと私は予想する。』の部分だ。

「…記事の内容はいいといて、よく入手できたな。律っちゃんの記事は会員制だったはずだが」

彼女にも彼女なりのポリシーがあって、『自分が認めた人にしか記

事を読ませない』だそうだ。

「一年生にして早くも律っちゃんから認められるやつがいるとはな。」

「フッフッフ…センパイ、それはアタシなんですよ！」

「そうなんだよー。サキちゃんは津先輩に認められた唯一の一年生なんだよ」

と得意げにマナミが言う。サキちゃんとやらは偉そうに反り返っている。なんだ、よく見てみればそのサキちゃんとやらはネゴシエイターじゃないか。

「なるほど、今合点がいったぞ。サキちゃん、君は新聞部だろ？」

「ええっ！？お兄ちゃん、なんでわかったの？」

「律っちゃんが認めた人間でその人懐っこさといい物怖じしない姿勢といい、彼女がみすみす見逃すとは思えないからな」

「さすがですねセンパイ。その通りです」

「一年でこれだからな。もしかしたら律っちゃん以上に優秀なブン屋になれるかもな」

「ありがとうございます。その言葉、今後の励みにさせていただきます」

「ふぅ、ご馳走様」

「早いですね、先輩」

「特別急いでるわけじゃないんだけどね。……ちょっと行ってきていい？」

「いいですよ」

「ありがと」

というわけで一人になる。ああいうのが苦手だからじゃなく、昨日

の続きをするためだ。

「さてさて、今日はどんな掘り出し物があるんでしょうか」

今日は昨日とは違って詳しく見ていく。携帯ゲーム機・トランプ・様々な店の割引券、それに――

「・・・ダンベル？それにプロテイン？」

なんだか珍妙なものがでてきたな。ここには『筋肉筋肉ー！！』なヤツでもいたのか？

他にもないかとふと見た先にあったものが目に入る。

「やっぱりこういうのはお約束なのかねぇ」

エロ本だ、しかも結構刺激的な。幸いなことに俺にはマナミがいるのでこういうものを必要としたことはないが高く売れるので回収しておく。

こうして集められたものは販売用と非売品、ゴミに分別して保管する。あまり長い間離れているといろいろ言われそうなので後は放課後にでもするとしてそろそろ戻るとしよう。

「ただいま」

「おかえりー、なにやってたの？」

「秘密」

「ふーん…」

ゴンッ！コロコロ…

突然、軟式のボールが飛んでくる。グラウンドで野球をしている奴らのファール球だろう。

「マナミが返してくる！」

そう言ってボールの元へ駆け寄る。ボールを持って縁の方へ行き、下の奴らに投げることを知らせてからやさしく投げる。

そんな行動の一部始終を目で追っていたが、途中でふとあることに気付く。

真人がいってた『あの人』っていうのは本当に昨日のときのリーダなのか？

俺が屋上を制圧したことは、事後だが実際に屋上であったんだから知っていてもおかしくはない。
ただ、転校してきたばかりの生徒がさして俺もハギもケイも知らないようなヤツのことを知っていようか？

もしそうだとすると、アイツの言う『あの人』ってのは、まさか…

「やっぱり気になっちゃいますか、センパイ？」

「ん？あ、あぁ、サキちゃんか。…まぁね」

「やっぱりセンパイも男子ですね！では、行ってきます！！」

俺に敬礼をしてからマナミの元へ気付かれないように接近する。
だが適当に返事をしたためサキちゃんが何をしようとしているのかがまったくわからない。

「よく見ておいてくださいよ、センパイ！」

ばさぁっ――

その後俺が何を見たのかは言うまでもない。ただあえて言うのであれば、『赤と白のしましま』だった。

「ちょ、サキちゃん！？」

今までにないほどに顔を真っ赤にしてスカートを抑えるマナミ。

「やりましたよ、センパイ！」

したり顔のサキちゃん。そして――

「…グッジョブ！」

力強く親指を立てる。それと同時に鼻血の噴水を噴き上げ、段々と意識がブラックアウトしていく…

仕事明け（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

誤字脱字の指摘・感想等々お待ちしております。いや本当に執筆時のモチベーションに影響しますので、できればお願いします。

m（＿）m

発露

「・・・んぱい・・・せんぱい・・・」

誰かが俺を呼んでいる。意識が戻るに連れてはっきりと聞き取れるようになってきた。

「・・・先輩！起きてください！」

「んっ・・・あぁ、大丈夫大丈夫」

とりあえず上半身だけを起こして伸ばしていた足を折りたたんで座ると・・・

「あっ、お兄ちゃん、気がついたんだね」

マナミが目の前にいた。その向こうには正座をしている（恐らくさせられている）サキちゃんがいた。

「お兄ちゃん…見た？見たよね？」

「なっ、何をだ？」

じ～～

言わなくてもわかるでしょと言いたげな目で見てくるが、わからないなとそっぽを向く。

「う…その……マナミの……スカートの中」

やっぱりそうだよな。しかし困ったことになった、こういうときは正直に認めるべきなのか？それともあくまでシラを切ったほうがいいのか？

悩みに悩んだ末に――

「見てない」

後者を選んだ。言ってしまった以上もう後戻りはできない。

「ホントに？」

「本当に」

「じゃあお兄ちゃん、どうだった？」

「赤と白の縞ぱん、そりゃあもぅ抜群に良かったぞ。」

「へぇー」

「あ〝」

（しまった！思わず言ってしまった！）

一瞬にしてすべてが凍りつく。
マモルは　あたまが　まっしろに　なった　！！　▽

「お兄ちゃんのえっち！！うそつき！！」

世界の名ストライカーをも凌ぐような強烈な蹴りが放たれる。
丸見えだったがマナミも俺も気にする余地なんてない。
俺は座っていてマナミは立っていたため、マナミの蹴りは俺の喉元を狙っていた。この一撃をまともに受けてはひとたまりもない！

「……！！」

バシッと蹴りを受け止めたのは良かったがいつものクセで威嚇してしまった。さらに悪いことにテンパっていたせいで遠慮は一切できなかった。

「っ！？」

マナミは完全に俺の威嚇に気圧されてしまい床にぺたんと座り込む。他のメンバーは距離が離れていたので威嚇の効果はほとんどなかった。

ただマナミへの影響は深刻で、顔は恐怖で青ざめ小刻みに震えていた。

「あ…わ、悪い。クセで、つい…」

平静を取り戻したものの、苦しい言い訳しか出てこない。

「お兄ちゃん、怖い・・・」

さて、どうしたものか…

「マナミちゃん、先輩も悪気があってやったわけじゃないんだよ。さっきのはちょっとした事故なんだよ、だから忘れよ。ね？」

やはりこういうときにクラスメイトやダチは頼りになる存在だな。

「ありがと。…そうだよね、お兄ちゃんはいっつもマナミを守ってくれてるもんね。このくらいはできないとダメだよね。」

驚くべきことに、さっきまでの状態からは一転、いつものマナミに戻る。

気がつけば昼休みも残り数分、話も一段落したところで今日はここらでお開きにして片づけをする。

そんな時、俺の携帯が振動し着信を知らせる。

発信者は…おやっさん！？

「はい、もしもし」

「おぉ、繋がったか。私だ」

「どうしたんですか？おやっさん　こんな真昼間に」

「君に渡したいものがあってな。学校帰りにでもよってくれないか」

「学校帰りですか、いつもの時間じゃダメなんですか？」

俺個人としては、昨日の今日だから学校帰りのほうがありがたいが

「夜からは総会があってな。他にも用があってそれから2・3日は留守にする予定だ」

「わかりました。じゃあ夕方に」

「…というわけで、今日は一緒に帰れそうにない」

マナミは「はーい」と返事をして、クラスメイト達と帰っていく。

一時はどうなるかと思ったが、何事もなくてなによりだ。

――教室――

屋上から戻った俺は律っちゃんの所へ向かう。

「仕事を依頼したいんだがいいか？」

「あなたらから仕事？情報操作か何かかしら」

それも頼みたかったが「違う」と否定しさらに「宣伝だ」と続ける。

「あぁ、気まぐれ市をやるのね」と律っちゃんも気付いた様子。

「明日の昼休みに開店する旨を宣伝してくれ。あとは全部そっちにまかせる。頼めるか？」

「おまかせあれ」と畏まる。

「報酬はいつも通り売り上げの１割な」

「わかってるわよ。ところで、何か目玉商品とかないの？ないと広告作りにくいんだけど」

「っと、忘れるとこだったな。今回は『夏の必需品』と『男子の必需品』だ」

律っちゃんはそれだけの情報からそれらが何であるかを推測し、

「今回はすごいもの売るのね。報酬が多くなることを期待してるわよ」と言って手を差し出す。

「それには宣伝を頑張ってもらわないとな」と言って俺も手を伸ばし堅い握手を交わす。

午後の授業が始まる。しかし俺の頭の中はおやっさんが俺に見せたがっている物のことでいっぱいだった。

過去の例からして、今日も手に入れたお宝の自慢と見て間違いないだろうがたいていロクなことにならない。年代物のワインを自慢してきたときなんか未成年の俺に酒を勧めてきたし。

「守、ミョウバンの化学式わかるか?」と教師に指名されたが

「硫酸アルミニウムカリウム12水和物、です」と即答する。

クラスメイトの感嘆の声を他所に考察を再開する。

渡したいものがあるというのは口実で、実は他の用があるとか？『留守の間、東雲支部を頼む』みたいな。

あるいは今後についてか？『高校卒業後も続けるかどうか』とか。

午後の時間のほとんどを費やしたが所詮は考察、行ってみないとわからないという結論に至った。

そして放課後、俺は学校からおやっさんのいる事務所へと舵を取った。

発露（後書き）

読んでいただき、誠にありがとうございます。

おやっさんが守るに渡したいものとは？つーかそもそもそのために呼んだのか？

次回、『物憑』に続きます。

物憑（前書き）

前回は『物憑・露店』としていましたが執筆上の都合、っつーか思ったより長くなったので別々にすることにしました。

――事務所――

コンコンとドアをノックすると、ドアの向こうから「入りたまえ」と一声。

「失礼します」と言って中に入ると、おやっさんがコーヒーを淹れて待っていた。

「時間通りだな。」

「当日の昼に突然呼び出された割には頑張った方ですよ。って、時間指定なんてしてないでしょ」

「そうだったか？まぁそこに座れ」

俺は言われた通り座り、「渡したい物とは？」と尋ねた。

「これだ」と言っておやっさんが差し出したのは一振りの日本刀。外観はごくごく普通の日本刀で有名武将のものだと思った。

「骨董市か何かで手に入れた掘り出し物ですか？」

この質問におやっさんは答えず、「手にとってみればわかる」という。

その通りにしてみると、この刀がどういうものなのかが瞬く間にわかった。

「・・・・・物憑、ですか」

「そのとおりだ。どうだ、なかなかいいだろう?」

確かに刀としては間違いなく業物の類に入るだろう。だがこの刀から俺やおやっさんとは違う第三者の波長を感じた、しかも俺はこの波長に親近感のようなものを抱いた。

「しかしこんなものどっから手にいれたんですか」

「このあたりの警察署の署長が私の友人でな。処分に困っていたその刀を私が貰い受けた訳だ」

「処分に困っていた?」とさらに尋ねる。

「なんでも持ち主には不幸が訪れるらしい」

「いやいや、そんな危なっかしい物いりませんって」と刀を返そうとすると、「話は最後まで聞くものだ」となだめられた。

「その刀は数年前にあった殺人事件に使われた凶器なのだ。その事件もある兄妹が両親の虐待に耐えかねて両親を殺害した、というものだ。」

「つまりこいつは、妹思いの兄の魂が宿った剣ってわけですか。もう俺に両親はいませんけどね」

「そういうわけだ。そう考えるとなかなか君にお似合いではないか」

「確かにそうですね。じゃあこれはありがたく頂きますよ」

「それに君もこの前の一軒で一躍有名人だ。持っておいて損はないだろう」

ここで疑問が生じた。「コレを学校に持って行けと言うのか？」

そこでおやっさんに聞いてみると「もちろんだとも」と。　俺は沈黙した。

「そのまま持ち歩けばワッパをかけられることくらい私もわかっている。この後綾君のところへ行くといい、手配は済ませてある」

どうやらもって行かないという選択肢は用意されていないらしい。

帰り際に「ここにはないんですね」と軽く嫌味を言うと

「ここは私にとっては休憩室みたいなものでな。コーヒーに関する

ものと葉巻以外に大したものはないのだよ」と軽く処理されてしまった。

―――神社―――

社務所の前に立って「守です」と言うと奥から「上がってちょうだい」と返ってきた。

上がると部屋に通され、中央の机越しに対峙するようにして座る。

「話は聞いてるわ。これよ」と言って渡されたのは竹刀を入れる袋だった。

「え？あの・・・これですか？」

「そうよ。ちゃんと入るでしょ？」

試しに入れてみたが確かにすっぽりと収まった。鍔の部分が多少気になるがこの程度は許容範囲内だ。

「確かに入ったんですけど・・・俺、剣道部じゃないんで目立ちますよ？」

「道着を着て『マーーーン！』って言ってればバレないわ」

「そんなのいやですよ」と即効で断る。

「冗談よ。あなた結構学校で奇抜なことしてるらしいじゃない？だから最初は目を惹くかもしれないけど数日もすれば馴染むわ」

「よく知ってますね。まるで俺を監視してるみたいですね」

「監視なんてしてないわよ。それよりもちゃんと使いこなせるの？」

「大丈夫ですよ。だって僕の苗字は『黒武者』ですよ？」

「そうだったわね」

「へぇ、君があの『黒武者』の姓を継ぐものだったんだ」

突然の割り込みに俺は「誰だ！？」と声を荒げ、刀を抜く。

「敵じゃないわ。私の相棒みたいなものよ」

「そういうこと、よろしくね」

そういってぺこりと頭を下げる。

それに対して「こちらこそ」と言い深々と頭を下げる。

「そんなに畏まらなくていいわ。それに君とは身も心も共有した仲じゃないの」

身も心も共有…？まさか、コイツは・・・！

「もしかして、昨日俺に憑依した・・・」

「えぇ。なかなか良かったわよ、あなたの体」

「誤解を招くような言い回しはやめてくださいよ。でもそうすると、貴女はやっぱり霊的な・・・」

「そうねぇ。でも霊というよりかは、鬼に近いわね」

「あの、霊と鬼って何が違うんですか？」

「特に違いはないわ」

拍子抜けする答えにずっこける。

「でもある程度は実体があるから、見える人なら触れられるわよ。さわってみる？」

そう言われたので肩や腕の辺りに手をやる。確かにさわれるし、掴むこともできた。

「なんならこっちの方も試してみる？」

やたらと胸を強調するがマナミよりもちょっと大きいくらいなのでそんなに効果はない。そもそもマナミでない時点で俺には効果がないのだが。

「遠慮しときます。にしても話を聞く限り、誰にでも見えるってわけじゃなさそうですね」

「仮初にも私は鬼よ？普通の人には見えないわよ」

「それに彼女とは言葉を発さずに会話ができるのよ」と綾さんが付け足す。

（こんな風にね）

（なるほど、こうやってあの時も語りかけてきたわけか）

「ところで、いつも一緒にいる女の子なんだけど・・・」

「マナミのことか、義妹（いもうと）だよ。」

「あぁ、妹さんね。彼女から目を離さないほうがいいわ。本人も君も気付いていないみたいだけど、彼女にはなにかあるわよ」

「ご忠告どうも。ただ人の家の事にまで土足で上がりこむのはいただけないね。これまでもお前が見てて綾さんに流してたんだろ？」

「そのことについては謝るわ。もう綾に報告もしない。でも君の傍にいるのはやめない」

「どうして？」

「だって見ておもしろいもの。それに暇なときには話し相手になってあげるわ」

「…まぁいいか。どうせ俺以外には見えないだろうし」

「さっすが、話がわかるじゃない！」

そうこうした後、竹刀袋を肩にかけ神社を後にする。

――道中――

「っらぁ！」

通りがかった河原で学生が喧嘩をしている場面に出くわした。見たところ他所の学校同士だし、俺は関係ないから足早にその場を去ろうとした。

その時――一人の顔が目に入った。

（アイツは・・・・ターシャル！？）

俺は足を止め、他校同士ではあったが割り込もうと思った。しかしサキちゃんの言葉が脳をよぎる。

『変に喧嘩吹っかけたりしてウチの学校も襲撃されるなんてことのないようにしてちょうだい』

俺はチッと舌打をして、その場を後にした。

――ガスッ！

相手は受身も取れずに背中から倒れ、起き上がってこない。

「へっ、逃げ回ってた割にはざまぁねえな。次はどこだ？」

「場所的には南高が近いッス」

「南高は最後だ。あそこには守さん、ハギさん、ケイさんがいるからな。」

「了解ッス。だったら次は東高ッスね、ちょっと遠いッスけど」

物憑（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

三人のことを知る彼の正体やいかに！？

次回、『露店』に続きます。

実家に帰るのでしばらくは更新できません。

露店（前書き）

やっと実家から帰ってきました。実家でも書いてはいましたがストックはあまりないので特別ペースアップしたりはしません。

「…ぶえっくしょい！！」

とのっけからドでかいくしゃみ。

「大丈夫？お兄ちゃん」

マナミがティッシュ箱を持ってきて俺の体調を気遣う。

「あぁ…大丈夫大丈夫。きっと誰かが噂してるんだろうよ」

とマナミからもらったティッシュで鼻をかみながら言う。

「ならいいけど、夏風邪はかかると大変なんだから気を付けてね？」

「わかってるって。そうだ、屋上のことなんだけど…」

「あぅ…」

マナミの反応がよろしくない。何か思い当たる節があるようだ。

「もしかして…今朝サキ先輩に呼び止められてたのって、そのせい？」

「いんや、あれは別件。だいたい、それぐらいの内容だったらお前

も一緒だって」

そういうとマナミはさっきまでの明るさを取り戻した。

「そっか。じゃあなに？」

「あのメンバーに俺らのメンバー、具体的には律っちゃん・マナ・あと一応陸もだな、こいつらも混ぜてもらえないか？」

「マナミ的にはおっけーだけど、みんなに聞いてみないとね」

そう言ってメールを作成しはじめる。意外とあのあつまりは民主的だなとひとり感心した。

１０分もすれば皆から返事が返ってきて、満場一致でＯＫだそうだ。

「ってなわけで、今日から晴れて全員が屋上で昼飯を食べれるぞ」

「なにが『ってなわけで』だよ、決まった段階で教えてよ」

と陸が不満を漏らす。

「いやーすまん、忘れてた。昨日は露店の事でいっぱいいっぱいでな」

「まぁいいわ。とにかく屋上に行きましょ？」

屋上についてみると、例のごとく各個人の席は決められていた。

律っちゃんはサキちゃんの隣で、マナは俺の隣、陸は…律っちゃんとマナの間でその間に一人ずつマナミのクラスメイトが配置されている。

なんか、狙って配置したよな？　って言いたくなるような配座だ。

「じゃあお先に！」

席に着くや否や俺は弁当を急いで食べる。

半分くらい食べたところで食事を切り上げ、露店の支払所を設立する。特別指示は出していなかったが昼食スペースは支払所よりも後ろになっていた。

あとは開店するだけになったことを確認して

「それじゃマナミ、屋上の出入り口のドアを開けてきてくれ」

「んー」

「いいか、開けたらすぐに戻ってくるんだぞ！」

「たんじょーぶ、だいじょーぶ。」

――ギィィィ

俺の注意もむなしくマナミは開けた直後にこちらへ戻って来なかった。そのため・・・

「開店だな？行くぞ！！」

わーーーっ、と人が津波のように押し寄せる。マナミはそれに呑まれ、激流の木片状態だった。

「だから言ったのに・・・マナ、レジ頼む！」

「え！？ちょっと、マモル君！？」

俺はマナにレジを任せ、マナミを救出しに人ごみの中を突き進む。

「おにーーちゃーーん！」

声の方に目をやると、マナミの手が流されていくのが見えた。それを頼りにさらにかきわけて進む。

「あっ、お兄ちゃん！」

「だから言ったろ。帰るぞ」

マナミを抱きかかえ、出入り口の建物向けて飛び上がる。その後、建物を蹴りさっきよりも強く反対側に飛ぶ。

――ダン！

レジの向こう側まで飛び、両足で力強く着地を決める。

「王子様とお姫様がご帰還なさいました～！」

マナミのクラスメイトたちは悠長にも俺達をからかっていたが俺の方はというと・・・

「マモル君、マナミちゃんを救出したんだったら早くこっちを手伝ってよ～！！」

「露店の様子もいい記事のネタになるわ～！」

「Ｚｚｚ…」

マナは客の対応にてんてこまいしていた。律っちゃんは記事の材料集めに心血を注いでいた。陸に至っては寝てた。

「はいはい、今いきますよっと」

マナミをおろし、マナのヘルプに向かう。行きがけの駄賃に軽く陸を蹴っておいた。

「待たせたな、ありがとよ」とねぎらい、隣に座る。

「っしゃあ！お前ら3列に並べ、まとめてレジやってやらあ！」

そういうと彼らは軍隊並みの乱れのない動きで隊列を変更し、

「これください！」／「……これ」／「いくらですか？」　と一気に商品を差し出す。

「それは３００円、そいつは１５０円、それは５００円だな」

金額を言い、お金を受け取り、お釣りが必要な人にはお釣りを渡す。あとはこれの繰り返しだ。

マナの方を見ると口をぽかんとあけていた。

「ねーおにーちゃん、このカバーかけてあるの何？」

「それは今日の目玉商品だ。絶対にカバーをのけちゃだめだぞ」

「はーい。・・・・・・・・（ドキドキ）」

「こっそり見ようとするなよ」

「ギクッ！」

「油断も隙もありゃしない。…おい待て！小銭ちょろまかしてんじゃねぇ！１０円足りんぞ！」

「先輩スゴイよねー。レジで三人を同時に相手にしながらマナミちゃんとも会話してるし」

「しかもちゃんとお金の計算とかもしてるしねー」

「実はセンパイの脳ってコンピュータ並の処理能力なんじゃない？」

「え！？先輩ってサイボーグだったの？」

「いや、誰もそんなこと言ってないから」

「もうすぐ完売なんじゃない？」

「陳列してあるやつは、な」

最初は口を開けていたマナも今では俺の隣に座ってマスコットガールになっている。律っちゃんと陸は相変わらずのようだ。

「守先輩とマナ先輩ってなんかいい感じだよねー」

「でも守先輩にはマナミちゃんがいるじゃん、どっちをとるのかな？」

「センパイのことだから『愛と恋は違う』とか言って両方をとるんじゃない？」

「「それありそー」」

「でも、なんでマナ先輩は守先輩が好きなの？マナミちゃんのこともよく知ってるのに」

「「さあ？」」

「ふっふっふ、それについては私が答えましょう！」

「知ってるの？サキちゃん」

「もちのろんよ。なんでも中学校の頃、マナ先輩は守先輩に助けてもらったことがあって、それがきっかけらしいわ」

「「へぇー」」

「それに、あの二人は幼馴染らしいの。フラグがビンビンに立ってるわ！」

「そういやさー、中学校の頃の守先輩ってどうだったんだろね？」

「「あ、それに気になるー」」

「師匠に聞いたんだけど、その辺については全っ然教えてくれないのよねー」

「どうだったの？マナミちゃん」

「え？えーっと…い、今と大して変わってないよ？」

「「ふーん…」」

「じゃあじゃあ、『治安維持局』ってどんな組織なの？」

「あー…あれは…知らない方がいいと思うわよ」

「なんでー？」

「センパイの印象が変わるわよ、マジで」

「人の噂話はその辺にしとけ」

突然お兄ちゃんの声が割って入る。その声は盛り上がっていた状態でもはっきりと聞くことができた。

「お兄ちゃん…怒ってる？」と恐る恐る聞いてみる。

「ちょっとな。人の過去なんて詮索するもんじゃないぞ」

その時のお兄ちゃんはちょっと怖かったけどみんなで謝ったらすぐにいつもの優しいお兄ちゃんに戻った。

「毎度ありー。・・・さて、完売だ！」

「でも結構人が残ってるね」

「そりゃこれからがメインだからな」

そう言ってお兄ちゃんはみんなの前に立った。

「さぁ皆さんお待ちかね！これより気まぐれ露店恒例の『気まぐれオークション』を開催します！」

いぇーーい！！

ものすごい人の声が屋上中に響き渡る。

何が気まぐれなのかサキちゃんに聞いたら、「開催するかどうかも、売るものもすべてセンパイの気まぐれのオークション」らしい。

「それじゃ、本日の商品をお見せしましょう。それじゃ、持ってきてー！」

そう言うと陸先輩がお兄ちゃんの言う『目玉商品』を台車に乗せて運んでいった。

「ほい、ご苦労さん。今回の商品は・・・コイツだぁ！！」

勢いよくカバーを外す。その先には――

「…エアコン？」

「だね。どっからどうみても」

「そう、今回の目玉商品は空調設備（工事込）だ！どこに設置するかは落札した人の自由！」

それを聞いた参加者たちの歓声が耳をつんざく。

「すごい熱狂っぷりだねー」

「ホントすごいねー・・・ん?アレ美穂じゃない?」

「え~?・・・あ、ホントだ。みほりんだ」

「美穂って野球部のマネージャーだったよね。部室にでも置くのかな?」

「たぶんそうじゃない?去年も熱中症で何人か病院送りになってたし」

「それじゃ、1円からスタート!」

「千円!」

「二千円!」

「五千円!」

そしてあっという間に一万円の大台に乗り上げ、さらに高値が提示される。

「二万五千!」

「二万八千!」

「三万！」

このあたりになってくると脱落するものが出始める。

「三万三千！」

「三万七千！」

「…四万！」

さっきに比べるとほんの一万上がったくらいだがほとんどのものは振り落とされ、上げ幅も小刻みになってくる。

「四万二千！」

「四万二千三百！」

「四万二千五百！」

「五万！！」

それを境に場が静まり返る。最後の一声が完全にトドメとなった。

「いませんか？五万以上はいませんか？……ハイ、じゃあ五万円で落札！！」

「ほえ～、五万円で落札だって～」

「一気に飛ばしたわねー。…美穂は残念だったわね」

「みほりんちょっとかわいそうだね…。でもこのお金って部費からだったのかな？」

「たぶん自費よ」

「「マナ先輩！」」

「野球部は毎年部費を限界まで使ってるからこういうことに使うお金はないはずよ」

「ということは美穂は…」

「身銭を切る覚悟だった、というわけよ。そこまで野球部の役に立ちたいと考えてるのね」

「・・・・・・・」

何も言えなかった。その場から帰ろうとするみほりんを見てはなおさらだった。

――階段――

「はぁ…買えなかったかぁ」

「そんなに悲しむことはないぞ」

「え…？」

「野球部のマネの小林美穂ちゃんだろ？空調の件は残念だったな」

「守先輩…。どういうことですか？」

「実は売り物にする予定はなかったんだが扇風機が二台ほどあってな。それをやるよ」

「本当ですか！？い、いくらですか？」

財布を出して現金を出そうとする。俺はその手を抑えて――

「金は要らんよ。その金で氷とか飲み物を買ってやりな。」

「ハ・・・ハイ！ありがとうございます！」

深々と頭を下げる。

うちの学校の野球部はあまり強くないので興味がなかったんだが、今年ばかりは頑張っててもらいたいなと思った。

露店（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

大盛況のうちに幕を閉じた露店、しかし今回は商品数が多いので店じまいにはまだ早い！

次回『露店（夕）・会合』に続きます。

ご意見・ご感想・誤字脱字の指摘等々お待ちしております。

露店（夕）・会合（前書き）

露店（夕）・会合

「いやぁ儲かった儲かった」

「あっお兄ちゃん、どこ行ってたの？」

「ちょっと売り上げを数えにな」

「それで？いくらくらいの黒字なのかしら」

俺は人差し指を立て「コレくらいは堅いな」と言う。

そして懐から茶封筒を出し、「これが今回の報酬な」と言って封筒を律っちゃんに渡す。

封筒を受けとると律っちゃんは真っ先に中身を確認し、「太っ腹ね」と言う。

それから「ちょっといいかしら？」と続け、俺を屋上の人目のつかないところに連れて行く。

「またいい写真が入手できたのか？」

「違うわよ。…沙希から聞いたんだけど、マナミちゃん、泳ぎにだけは行きたがらないらしいの。アナタ何か知ってるんじゃない？」

「泳ぎに行きたがらない？初耳だな。中学の水泳の授業にはちゃん

と出てたとは聞いてるが」

「ますます謎が深まってきたわね。これはきっといい記事に…」

「記事にはさせんぞ」

「そう言うとは思ってたけど、ほんっとガード固いわねぇ。そのうちストレスでハゲるんじゃない？」

「俺のことはどうでもいいだろ、それよりもマナミが泳ぎたがらない理由だ。俺が聞いた限りでは人並みに泳げるそうだから、カナヅチじゃないんだとすると…」

しばらくの間沈黙が続く。

「ねぇ守」

「ん？」

「アナタ、マナミちゃんの裸見たことある？」

「なっ、ばっ…何を言い出すんだ急に！」

想像しただけでいらん所が活性化してしまう。立った状態ではまずいので地べたにあぐらをかいて座る。

「別にそんなことしなくてもそのくらい予想してたわよ」

「お前じゃなくて、マナミやそのお友達に見られたら気まずいからだよ！」

「ちゃんと考えてるのね。見られたらそれはそれで面白そうだけど」と言い、プププと笑う。

「勘弁してくれ。で、マナミの裸と泳ぎたがらないのと何の関係が・・・・！！」

「どうやらわかったみたいね。それが一番ありそうな線じゃない？」

「……考えたくはないがな」

「確認してみるしかないわね」

「どうやって確かめろと？」

「アナタとマナミちゃんの間だから見せてくれと言えば見せてくれるんじゃない？」

「そんなことしたら１８禁になるだろうが！つーか俺が嫌じゃ！！」

「じゃあ事故を装って着替えてるとこを覗くとか…」

「……そうするしかないか。それなら後腐れしないだろうし」

「何があっても『アタシたち』に頼む気はないのね」

「ったりめーだ。人様に撮らせてやるほどマナミの裸は安くねーよ」

「あら、残念ね。でも修学旅行とかの時はどうするの？」

「同行するに決まってんだろ」

「は！？アナタ正気！？」

「正気も正気、大マジメだぜ？」

「ま、まぁ…アナタのことだからきっとアテがあるんでしょうけど」

「わかってるじゃんか。話を戻すが、その件については俺も詳しく知りたい。だから調査することは許可する。その代わり――」

「その代わり誰かに感付かれないこと・他言しないこと、でしょ？」

「それと俺が手を引けと言ったらすぐに手を引くことだ。」

「わかってるわよ」

――時は放課後、所は屋上・屋上といっても守たちが平定したのとはまた別の屋上――

「なぁ、この本に出てる子レベル高くねぇ？」

「やっべーなこれ！買いだ買い！」

「すいません、コレください！」

「毎度。それは３００円だね」

ワイワイ、ガヤガヤ―

「お前は他人のシマで何をやっとんや」

「何って…エロ本の即売会だが？」

「昼と同じ場所でやれよ！」

「いやーあそこだと誰か知った女子が来るかもしれんからな」

「だったら事前にアポを取るとかしろよ！」

「あー…それはすまんかったな」

「まぁそれも過ぎたことやし、エエわ。んでわしらに何の用や？」

「お前らもユキちゃんからいろいろ聞かれただろ？」

「ユキ・・・？あぁ、風紀委員のお偉いさんね」

「他校が襲撃されてるっちゅーやつか。ワシらは何もしとらんぞ」

「わかってるって。それより東高が襲撃されたらしい。だよな？律っちゃん」

物陰から律っちゃんが出てくる。

「気付いてたの、流石ね」

「なんや、自分もおったんかいな」

「俺から隠れようなんざ10年早えんだよ」

「恐れ入ったわ。…それで東高なんだけど、速報によると陥落したらしいわ」

「意外と持ったな。あそこにはパッとした奴はいなかったが」

「そんなことはどうでもいい。それより、お前ら何も思わないのか？」

「別に何も」

「じゃあ、今回あちこちを襲撃してるのはドコの高校だ？」

「そりゃ末高やろ、それが・・・！」

途中で真意に気付き、二人とも顔がマジになる。

「確かに変だ。近いとこからツブしていくんだったら東の前にココに来るはず――」

「そのはずがうちに来なかった。何か訳ありというわけだ」

「せやったら、何が原因なんや？」

「こっから先はすべて俺の推測なんだが・・・理由は『俺』だ」

「お前が？」

「これは事実だと思うんだが…今回の事件、手を引いてるのはターシャルだ」

「ターシャルう？誰や、それ」

「藤崎（ふじさき）　遼（りょう）と言えば分るんじゃないかしら」

律っちゃんが横から補足を入れる。そう聞くと二人はすぐに理解し――

「アイツが…。だが、もしそうならお前が理由なのも納得できるな。アイツ中学ん時からお前に固執してたし」

「他校の襲撃を阻止する気はないが、さすがにここに来られたら防戦せざるを得ない。そうすれば奴との戦いは避けられないだろう」

「それであいつがどれ程なのかが知りたいんだな？」

俺は黙ってうなずく。

「正直にゆうて、タイマンやったら必ず勝てるっちゅう確証はない」

「俺もだ。２対１なら絶対負けねえんだがな」

「嘘でしょ！？このあたりの高校生であなたたちより強い人なんて守以外には…」

「いるんだよ。しかも１コ下にな」

「なんてこと……」

「それで、これからどうするんだ？」

「特別何もしない」

「せやな、上のモンらしくどっしりと構えとくか」

「ところで、ターシャルってどういう意味？」

「ニュアンスとしては『3番目』って感じだな。サードだとありきたりで語呂が悪くてな」

「それはワシらとお前に次いでっちゅう意味か」

「そういうこと。もっとも、このころはお前らのことは何も知らなかったがな」

「ただいまー」

玄関の奥からパタパタとスリッパの音が近づいてきて

「おかえり、お兄ちゃん！」と笑顔１００％で迎えてくれる。この笑顔の前では１日のどんな疲れも忘れることができる。

「今日は露店で疲れたなー」と言い、腕を回す。

「じゃあ先にお風呂に入る？」

「いや、先に飯にしよう。腹減ったし」

「は～い。了解」

また足音をパタパタとたてながらキッチンの方へ消えていった。

―食後―

「ごちそうさま」

「お粗末様でした」

「…なあマナミ」

「？」

「片付けが終わった後でいいんだけど…ちょっと踏んでくれないか？」

「えっ！？お、お兄ちゃん、それって・・・」

「頼めるか？」

「う、うん…お兄ちゃんのためだもん／／／」

「ねぇお兄ちゃん、裸足と靴下、どっちがいい…／／／？」

「靴下で頼む」

「意外とまにあっくなんだね／／／」

――しばらくの後

むにゅっ、むにゅっ

「あぁ～そこそこ。でももう少し強く」

「こ、こう・・・？」

ギュッ！ギュッ！

「あたたたた！あーでもいい感じいい感じ！」

「お兄ちゃん…これってただのマッサージだよね？」

「そうだぞ。それがどうかしたか？」

「だ、だって踏んでって…」

「だから今こうやって背中を踏んでもらってるじゃんか。」

「～～～～～～～～～っ！！！！」

そしてマナミはその場で飛び上がり、俺の背中を力いっぱい踏みつける。

「ぐえっ！」

「お兄ちゃんのいぢわる！！マナミの乙女心をもてあそぶなんて！！」

そういってマナミは自分の部屋に戻っていった。そのあとしばらく俺はのたうちまわり、悶えていた。

露店（夕）・会合（後書き）

ついに明らかになった『ターシャル』の正体！・・・といっても外側だけですが

ちなみに英語では『ｔｅｒｔｉａｌ』と書きます　たしか

次回、『取材』に続きます。

次は主要キャラの称号っつーかあだ名みたいなもんが明らかになります　横文字注意！

ご意見・ご感想・誤字脱字の指摘等々お待ちしております。

取材（前書き）

ちょっとばかし旅にでてたので遅れました。

前回の予告どおり、横文字が出てきます。

そのため、若干読みにくいことが予想されますのでご注意ください。

取材

――休み時間・教室――

俺はハギとケイのもとに向かう。前回同様クラスは静まり返り、ざわつきが目立つ。

「今日、空いてるか？」

「あぁ、空いとるで」

ざわつきが最高潮を迎える。

末高の他校襲撃は全員の知る所となっており、攻められる前に此方から打って出る―つまりカチコミをかける―のではないか、と。

「ラーメンでも食いに行かんか？この前の報酬ってことでおごってやるから」

「行くに決まってるだろ！タダ飯ほどうまいものはないしな」

「そういうことや、行くで」

話の内容を聞いてクラス中には安堵と少しの失望が漂う。

「で、どこのラーメンを食うんだ？」

「どこでもエエやないか。ワシらは食わせてもらうんや、文句言うたらアカン」

「それもそうか」

――昼休み・屋上――

「そういうわけで、今日は俺飯食って帰るから」

「えー、マナミも一緒に行きたい～～！！」

「そうよ、その方がいいわ。マナミちゃんを一人にはできないでしょ？」

律っちゃんやマナをはじめ全員からそう言われる。

「そうだけどさぁ…ケイとハギが一緒なんだよ、危ないだろ？」

「別に大丈夫でしょ。それにアナタ自身危ない存在なんだから」

「いやしかしだな…」

「だったらその腰につけてるものは飾りなの？」

そうだった。だれもツッコんでこないから忘れてたけど今俺は帯刀してるんだった。

「まぁ…なら大丈夫か。しかし見事に誰もツッコまないよな、コレ」

「だってマモル君だもん」／「先輩のことですからねー」／「だってお兄ちゃんだもん」

皆同じことを言う。だが俺もそれに慣れてしまっていて何とも思わなくなっていた。

「ねえお兄ちゃん、それさわっていい？」

マナミが刀に興味を持つ。

「絶対に駄目だ」

「どーしても？」

「どうしても」

マナミの目が潤い始める。四十八手の一、『泣き落とし』だ。

「・・・・・・・・・」

嘘泣きとはいえ、マナミに泣かれるとどんな固い決断も揺らいでし

まう。周囲からも『あーあ』的な雰囲気を生み出し、俺の葛藤を深いものにしている。

（物憑で何が起こるかわからんから、人に易々と触らせるわけにはなぁ…）

「お兄ちゃん…ダメ？」

四十八手の『上目遣い』と『手を握る』の組み合わせで迫ってくる。

「いくらマナミの頼みでも、これはちょっとダメ…かな」

これ以上は無駄だと悟り、涙を蓄えていた目はもう乾いていた。

「ちぇっ、お兄ちゃんのケチ！」

「どうする？諦めるの？」

「全然。でも正面からはだめだったから、今度はスキを見てちょっと借りちゃおっかな」

「でもなんでそんなにあれにこだわるの？」

「カッコいいし…何より、お兄ちゃんのものだもん！」

「兄が兄なら妹も妹ね、さすが兄妹」

「えへへ～」

――放課後――

授業から解放された俺は真っ先にハギとケイのところへ行き、それから三人でマナミを迎えに教室に行き、それから外に出た。

それまでに多くの学生とすれ違ったが誰もが道を空け、蛇ににらまれた蛙のようにその場から動かなかった。ガラの悪い奴らの大抵はどこかへと走り去っていった。

「いやー、すげぇ景色だな。絶景かな、あ、絶景かなぁぁ～～！」

「別に絶景やあれへん、いつもの景色や。それよりワシら、お前の妹を見るんは初めてやな」

「あ？そうだったか？」

「そうだな。こんなにカワイイ子、一度あったら絶対に忘れないからな」

「あ、ありがとうございます。
えっと、お、お二人ともマナミとは初対面ですよね？は、はじめまして。知ってるとは思いますがお兄ちゃんの妹のマナミです。いつもお兄ちゃんがお世話になってます」

「そない固くならんでええて、もっと肩の力抜き」

「そうそう、つかお前は俺の母親か」

「カワイイ上にこの礼儀正しさ！もう１００点越えて１２０点だな！」

「さっきから褒めちぎって好感度上げようとしてるみたいだが無駄な努力だぞ」

「お兄様にはすべてお見通しか、彼氏は苦労するだろうな」

「マナミはお兄ちゃんがカレみたいな感じですから、別にいらないです」

「おっと、さっそくフラれてしまったか。こりゃ残念」

４人が声をあげて笑っていたその時――

「あらあら、そんな豪華なメンツでどこに行くのかしら？」

校門のあたりに誰かが立っている。よくよく見ると・・・

「なんだ、律っちゃんか」

「なんだとは何よ、ずいぶんと失礼ね」

「悪い悪い、でもそんな豪華か？いつものメンバーその2って感じだが…」

「誰がどう見ても豪華よ！『阿吽（アルファ・オメガ）』の異名をとるハギ・ケイに加えて『無双守護者（アンライバル・ガーディアン）』の守、そしてその守をその気になれば意のままに操れる上にその可愛さ故学内でも数多くのファンがいるマナミちゃんよ！！！これを豪華と言わずしてなんと言うの！！」

説明を終えた律っちゃんは言い終えた後しばらくは肩で息をしていた。

（俺にもいつの間にか変な通り名ができてるんだな…、それも横文字の）

「ここに生徒会長のマナと風紀委員長のユキがいたら『南高七輝星（セブンスターズ）』が勢揃いなのに…勿体ないわ」

「セブン？言うて6人しかでてけぇへんかったで？」

「七人目はこのアタシよ」

なるほど。『七輝星』の選考基準はわからないが律っちゃんなら遜

色ないだろう。

「さよか。んで、わざわざ呼び止めておいて何の用や？」

「そりゃもちろん、アタシもこのパーティーに加えさせてもらうわ！」

「好きにしてくれ」

「いいの？お兄ちゃん」

「ああ。もし何かあった時はこっちに都合がいいように記事を書いてくれるしな。そうだろ？」

「まかせてちょうだい」

「ホントはそういうのがないのが一番なんだがな」

しかしやはりそうはいかなかった。

河原にウチの制服を着たヤンキーがいたのだ。近づいてみるとそいつらの多くはこの前屋上で倒した奴らだった。

「おい守、アイツら…」

「わかってる。心配すんな」

向こうもこちらの存在に気付き、いかつく体を揺らしいかにも不良らしく距離を縮めてきた。

「っ…」

ヤンキーを前にマナミは俺の背後に隠れ、二人は一応臨戦体制をとっていた。

「おうおうおう、皆さんお揃いでお出かけですか。楽しそうですなあ！」

先頭を歩いていたリーゼントの男が挑発をしてくる。今回は先を急ぐのでそんな安っぽい挑発には乗らず、早くケリをつけようと俺は一歩前に出た。

前に出ようとすると、マナミが服の裾を掴んでいた。そこでボタンを外し、マナミが引っ張る力を利用して学ランを脱ぎさらに前に進んだ。

そして腰のものに手をやる――すると向こうから

「お前そんなもん使っていいと思ってんのか！！」／「汚ねーぞ！」／「銃刀法違反だ！」

などとヤジが飛んできたが

「やかましい！！」

と一喝し、鞘から刀身を抜く。太陽の光が刃の銀色を一層輝かせ、この世に切れないものはないと思えた。

その姿を見て相手がたじろぐのを見てから、「とはいえ」と言いながら刀を鞘に戻す。

「俺だって人を切りたくはない。だからよ・・・」と続け、片足を下げる。

「失せろ」

そう言い放って抜刀し、リーゼントを切り落とす。

それだけで十分だった。アイツらは一目散に逃げ出し、あっという間に目の前には誰もいなくなった。

「流石ね」

「まあざっとこんなもんだ」

振り返ってマナミの方を見ると、何が原因でかはわからないが思った通り唖然としていた。他の三人はもちろんなんともない。

「おーい、大丈夫かー？」と言いながらマナミの目の前で手を振る。
すると「・・・はっ！」と言い我に返る。
「大丈夫か？」
「うん。ちょっとビックリしちゃっただけ」

「そういえば、あとの四人にも俺らみたいな通り名があるのか？」
「えぇ、あるわよ。マナミちゃんが『理想の妹（アイディアル・シスター）』・マナが『傾城の才媛（プリティ・タレント）』・ユキが『剛毅峻厳（ドーントレス・ストリクト）』よ」
「自分は何なんや？」
「アタシのはないわ。だってこれ全部アタシがつけたんだもん」
「そうか、じゃあ俺が名を授けてやるよ。……『真実の口（ボッカ・デルラ・ヴェリタ）』ってのはどうだ？」
「お兄ちゃん、それはダメだと思うよ」
「そ、そうか？じゃあ…『真実の語り部（トゥルー・スピーカー）』は？」
「それなら大丈夫そうだね」
「ふぅ。じゃあ律っちゃんの通り名はそれでいこうか」

「別にエエけど、律に事実を捻じ曲げて貰うとるやつがようそんな名前つけれたな」

「別にいいだろ、一般生徒や教員達にとっては律っちゃんが”真実”なんだからよ」

――歩くこと5分強

「やっとついたか」

「『麺処　うま味』…。ここって最近オープンしたところじゃない」

「安牌じゃなくて冒険にでたな、守」

「ワシは食えたらどこでもエエがな」

――ガラガラガラ

「らっしゃい！好きな席へどうぞ！」

入って早々威勢のいい声がかけられる。好きな席に、ということなので俺たちは座敷席に座った。

「やっぱこうなるのか」

俺とマナミの二人組とテーブルを挟んで残りの三人組に分かれた。

「嫌なら変わるけど？」と律っちゃんが言ったが断わった。

「なんだかんだいってお兄ちゃん嬉しいんでしょ？」

マナミがにこにこしながら座布団を寄せて近づいてくる。

「…まあな」

「はいはい、イチャつくのはそのくらいにして注文決まった？」

「じゃ、俺チャーシュー麺」／「ワシ醤油」／「俺は味噌な」／「マナミは塩！」

「いっぺんに言われてわかるわけないじゃない！」

「チャーシュー・醤油・味噌・塩　各一！！で？そこのブン屋の嬢ちゃんは？」

「…アタシも塩で」

「ヘイ塩もう一丁！」

「律っちゃんよりあのオッサンの方が優秀なんじゃないか？」

「む、向こうは広く浅くで、アタシは狭く深くなのよ！」

会話をしながらも律っちゃんは従業員の言動・態度、店舗の清潔さ・広さ等々隅々までチェックして手帳に書き込んでいた。

余談だがこの手帳は『ＩＮＦＯ・ノート』と呼ばれていて、彼女が知る情報はのすべてこの手帳に記載されているという。ちなみに現在で４代目だそうだ。

「ずいぶんとマジメだな」

「こういう記事には嘘はかけないからね」

「せやったら、この前の記事もホンマのこと書いてほしかったわ。屋上を制圧したのはワシとケイだけで守の名前があれへんかったやないか」

「あー、すまん。アレは俺が律っちゃんに頼んだんだ。教員に知れるとまずいんでな」

「でも生徒たちは全員お前がいたことを知ってるぞ？」

「教員は生徒の話よりも律っちゃんの記事を信用してるからな。逆手に取らせてもらったんだよ」

「ワシらのことは一切お構いなしか」

「慣れてるだろ？」

「それはそうだが…」

「だろ？さ、込み入った話はここいらで終いだ」

「お待たせしましたー」

ラーメンが5つまとめて運ばれてくる。大将が気を利かせてくれたらしい。

ズズズズ…

「ん、ウマい！」

「美味しい！」

「やっぱり麺は固麺やな」

「なかなかの味ね。宣伝のし甲斐がありそうだわ」

一同ラーメンに箸が進む。その分会話はおろそかになる。

――20分後

「いやあ、食った食った」

「オゴリだからさらに美味いな！」

「それは思ってても言うな、おごってやらんぞ」

「へいへい、以後気を付けます」

「んーじゃ帰るか。すいません、お勘定！」

「ヘイ！３８８０円になります」

俺は４０００円支払う。お釣りの１２０円はマナミにあげた。

ガラガラガラ……

「あざっしたー！！」

店を出た俺たちはその場で解散となったため、ハギ・ケイと俺・マナミ・律っちゃんに分かれた。

そして二人は帰っていったのだが、ハギが途中で振り返り、俺を呼んだ。

「なあ、守」

「なんだ？」

「おそらくワシらは遼と事を構えることになると思う。…その時に妹ちゃんを守れるか？」

「当然だ。しかしなぜそんなことを？」

「俺達にだってアイツには多少の因縁があるんでな、妹ちゃんにつきっきりというわけにはいかない」

「そうだろうな。だがマナミはこの件には無関係だろ」

「そう言い切れるか？この前言った通り遼はお前に異常な執着があるからな、お前をやる気にさせるためにやりかねんぞ。それにあそこはそういう所だ、正々堂々って方が珍しい」

「その時は・・・」

「その時は？」

「ぶち殺す」

普通に言ったつもりだが無意識のうちに凄みを利かせてしまった。だがその言葉に嘘偽りはない。

「おぉ怖い怖い、そうならんことを祈るわ」

そのあと二人は俺におごってもらった礼を言い、振り返ることなく夕闇の中へと消えていった。

「悪い、待たせたな」

「別にいいわ、何の話だったの？」

「ラーメンご馳走様って、人前でいうのが嫌だったんだろ。アイツ等らしい」

「・・・・・・・・・。」

「じゃあ帰ろ！お兄ちゃん」

「あぁ、そうすっかな」

「あっ！いっけない！！」

「なんだ、店に忘れ物でもしたのか？」

「違うわよ。今日は沙希との約束があったのにすっかり忘れてたわ」

「その割にはえらく落ち着いてるな」

「今日のことを言えば納得してくれるってわかってるからよ。…そうだ、アタシもご馳走になったことだし、いいことを教えてあげる

わ」

「いいこと？」

律っちゃんが耳打ちして言う。

「今日は白らしいわ」

「へぇー、それはいいこと聞いたな」

思わず表情が緩んでしまった。

「え、なに？何のこと？」

マナミは当然だが何が何だかわからないという様子だった。

「それじゃ、アタシも失礼するわね」

タッタッタ――

「二人とも！ちょ、ちょっと待って！」

「なんや、律やないか。どないしたんや？」

「ハァ…、ハァ…。さっき守と話してたことって・・・」

「妹ちゃんをちゃんと守り切れるか確認しただけだ」

「それで、なんて？」

「当然守り切ってみせるとさ。だが万一マナミちゃんに被害が出た

ら…アイツはブチ切れるだろうな」

「ずっと気になってたんだけど、守がブチ切れるとどうなるの？」

「まず眼が紅くなる」

「なるほど…、他には？」

「わからんけど、俺達と遼が手を組んでも勝ち目はないだろうな」

「すごいわね…。でも情報があるってことは過去にそうなったことがあるのね？」

「あぁ。一回だけあったらしい」

「たったの一回だけ？それに、らしい？」

「せや。あれは…中二の頃やったかなぁ、ようは知らんが守がブチ切れてアイツのおった中学の番格、轟（とどろき）とその取り巻きを病院送りにしてしまったそうや」

「ちょ、ちょっと……それって『轟沈事件』じゃ…」

「そうだ。言い方は悪いがあの事件の犯人は守だ」

「で、でもあの事件の被害者たちは全員引っ越してしまってこの町にはいないはず…」

「俺の知った奴も入院させられてな、見舞いに行ったときに聞いたんだよ」

「ワシらも最近まで半信半疑やったが、つい最近確信したわ」

「…証拠を掴んだのね」

「ああ。屋上で運動した後守と合流したとき、眼がうっすら赤かったんだ」

「目が充血しとるんとは明らかに違たからな。それに、始まる前に『紅眼』ゆうて逃げ出そうとした奴らもいてたしな」

「どうも間違いなさそうね」

「わかってると思うが公にすんなよ」

「当たり前でしょ、アタシだってまだまだ長生きしたいわ。

…となると、マナが守に助けられたっていうのはこの事件なのかしら？」

「それは知らんな。俺達が聞いた奴は拒絶反応がすごくてそれ以外のことはさっぱりだ」

「…そう」

「せや、もひとつおもろいこと教えたるわ」

「おもしろいこと？」

「お前、『般若』知っとるか？」

「ええ。どの勢力にも属さず無類の強さを誇ったという、あの…」

「そうそう。でもアイツはある出来事を境に姿を消す。そのある出来事っていうのが『轟沈事件』だ」

「じゃあ『般若』の正体も守・・・」

「それはないだろうな。もし守だったら、あの事件に関与したことは誰も知られていないんだから別に姿を消す必要はないだろ」

「それもそうよね…」

「でや、気に入ってもらえたか？」

「ええ、とっても」

ピリリリリ…ピリリリリ…

電話だ。発信者はおやっさんだ。

「はい、守です。仕事ですか？」

「ああ。四日後、いつもの時間にいつもの場所に来てくれ」

「わかりました。では、またそのときに…」

――ピッ

「またバイト？」

「そ、四日後に来てくれって」

「そっか、頑張ってね！」

「おう」

「…気が付けば明日から6月だな。月日が経つのは早いものだ」

「お兄ちゃん、オジサンくさいよ！」

「うっ…、でも本当のことなんだからしょうがないだろ」

「でもマナミ6月はきらーい」

「なんでだ？」

「だって土日以外お休みがないんだもーん」

「まぁ…そうだな。じゃあ6月6日って何の日か知ってるか？」

「しらなーい」

「『兄の日』なんだよ」

「…えっ！お兄ちゃんの日！？」

「そう。だから何かしてくれってわけじゃないけどな」

「じゃあじゃあ、『妹の日』ってのもあるの？」

「もちろんあるぞ。9月6日だったかな」

取材（後書き）

3人の話によると『般若』の正体は守ではないという・・・　だとすれば一体誰が！？

そして次第に明らかになる守の過去――マナミに語ることのできる日はくるのか？

次回、『身近な同業者』に続きます。

身近な同業者（1）

――四日後・事務所――

いつものようにまずはおやっさんと面会する。

「それで、仕事とは？」

「今回の目的は『とある組織の壊滅』だ。…それと、今回は二人で任務にあたってもらう」

「まさか、綾さんが？」

「いや、彼女ではない。もう一人はすでに現地で待っているそうだ」

「じゃ、俺も行きましょうかね。でも名前くらい教えてくれていいんじゃないですか？」

「おお、そうだったな。彼は私たちの世界では『無限射程』と呼ばれている」

「わかりました、じゃあ行ってきます」

外に出て、現地へと向かう。

――３０分後

現地に到着した俺はさっそく相棒となる人物を探した。そしてそれとおぼしき人を見つけた。

「遅くなりました、鳳です」

「お、来たね。僕が『無限射程（インフィニティ・レンジ）』、今日はよろ…」

握手をしようと振り返ったその瞬間、二人の動きが止まる。

「先生…！」／「守君…！」

「まさかこんな巡り合わせがあるとは、運命とはかくも奇異なものなんですね」

「全くだよ。でも君が相棒だっていうなら心配はなさそうだね」

「それは僕も同じです。…僕がこういうことをしてるのにちっとも驚きませんね」

「名簿で名字を見たときからもしや、って思ってたからね」

「さすがです。通り名からして、銃がご専門ですか？」

「そうだね。白兵戦もできなくはないけど君には劣ると思うよ。…ところで、こっちでもそういう喋り方なのかい？」

「いえ、違います」

「そうだよね。じゃあいつものようにしてくれないかな、それと『先生』って呼ぶのは…」

「じゃあ『ハルさん』で」

「…まあいっか。それじゃ、行こうか」

「行きますか」

「んじゃ、景気づけに…」

ハルさんはどこからかＲＰＧを取り出して構える。

「バックブラストで黒コゲにならないように離れてて」

爆音とともに弾頭が射出され、二階の部屋で爆発が起こる。すぐさま屋敷中の明かりが灯り、戦闘員がわらわらと出てくる。

「それじゃ、おやっさんからもらった刀のデビュー戦といきますか！」

戦闘員の集団に単騎で突撃する。

俺は飛び上がり、試し斬りと言わんばかりに一人を頭から刃を振り下ろす。

すると刃は見事に相手の体を真っ二つに切り裂いた。切れ味は申し

分なさそうだ。

裂けた体の間を通って前に進む。次は前と左右の三方向から襲いかかってきた。

まずは腕を伸ばし前方の戦闘員の腹を突き通す。そしてすぐさま刀を持ち替え、左へと薙ぎそのまま左方の戦闘員を胴を切断する。

次に左足を軸にして右足で地面を蹴り回転し、相手の攻撃をかわし股下から切り上げる。

再度前を向くと次は正面から一人向かってくるだけだった。

しかしそれは誤りであることが距離を縮めることでわかった。

後ろにも戦闘員がいる！これはいわゆるジェット・ストリーム・アタックだ！

そこで俺は最前列の奴を後ろに吹き飛ばすことで隊列を乱そうと前進しようとしたその時――

「伏せろ！」

俺は聞こえたとおりに地面に伏せた。次の瞬間には戦闘員三人とも上半身が吹き飛んでいた。

「避けれたということはこの通信が聞こえてるんだね」

「俺に通信システムが埋め込まれてること、知ってたんですか」

「オヤジさんに教えてもらってね」

「なるほど。それにしてもアンチマテリアルとは随分と物騒なものを…」

「でも役に立ったでしょ？さすがに連射はできないけどね」

「セミオートならある程度できると聞きましたけど」

「でも連射なんかしてどうするんだい？戦車の装甲に風穴開けるわけじゃあるまいし」

「職業柄、戦車を相手にすることもあるかもしれませんよ？」

会話をしながらも戦闘員を切り伏せ撃ち抜き着実に建物へと近づいていく。

「入口がなさそうだね。開けてあげるからまた離れててよ」

「入口ならありますよ」

俺は一度刀を鞘に戻し、近くにいた戦闘員を踏み台にして飛び上がり、二階に空いた大穴に手をかけた。

「驚いたなあ、すごい身体能力だね。じゃあ僕は一階から行くから」

「わかりました。また中で合流しましょう」

二階の部屋へと侵入した俺はさっそく戦闘員に囲まれていた。

「これはこれは、大層なお出迎えで」

俺は刀と鞘をそれぞれの手に持ち、二刀流の構えをとる。

戦闘員たちとのにらみ合いが続く。先に動いたのは俺で、鞘をシャンデリアに向かって投げる。

シャンデリアは地面に落下し、室内も闇に包まれた。

廊下に続くドアが開き、室内に光が差す。その光が映し出したのは一つの立像と多数の肉塊だった。

俺は投げた鞘を拾い、その部屋を後にした。

身近な同業者（1）（後書き）

身近な同業者・・・それは遠野先生だった！

表パートではまだ出番はないですが、以後ちょいちょい出す予定です。

次回は後編の『身近な同業者（2）』に続きます

このあとがきの部分が寂しいので次回からはキャラクタ達を登場させたいと思っています。

身近な同業者（2）

部屋を出て通路を右に折れ、つきあたりの角を左に曲がる。そこは長い一本の通りで、左右には他の部屋に通じる扉があった。

仕込んでいたのか俺が通路を進もうとすると部屋から戦闘員が出てくる。こういうときこそアンチマテリアルを連射するときだろう。

無い物ねだりをしてもしょうがない。俺は直進し一人一人戦闘員を切り捨てていく。

通路の半分を行ったか行かないかくらいになると敵も刀を装備していた。

刀をキンキンぶつけ合いながらも隙を見つけては一太刀浴びせ、息がある場合は確実に止めを刺し着実に進む。

一人の戦闘員と剣戟を繰り広げていると、搦め手からもう一人、戦闘員が刀を振り上げ迫ってきた。

俺は目の前の戦闘員の手を蹴り刀を手放させ、力ずくで位置を入れ替える。

搦め手の戦闘員も入れ替わりに気付いたが、振り下ろされた刃はもう止められない。結果俺と入れ替わった戦闘員は俺ではなく不意打ちを狙った仲間の戦闘員に真っ二つにされてしまった。

すかさず体の隙間から刀を突き出し、もう一人の戦闘員の脳天を穿つ。

直線通路も終わりに差し掛かると、まだ開けられてない部屋があるのに気付いた。

そこで戦闘員が使っていた刀を数本拾い上げ壁に沿って投げ、その後で通路を進んだ。

俺の接近を探知し扉を開けた戦闘員は、俺の思惑通りに串刺しになったりドアを出たとたんに飛んでくる刀に体を貫かれたりした。

戦闘員を全滅させた俺は通路の曲がり角に差し掛かっていた。

到着したその瞬間――

「チェストーーー！！！！」

すさまじい勢いで刀が振り下ろされる。が、その手のことを予測していた俺は直前に壁を蹴り、まがり角の隅に寄っていたため頬をちょっと切る程度で済んだ。

相手が体勢を立て直す前に首を刎ねる。

『示現流・碁盤切り』…正面から防御していたら俺が真っ二つになっていたことだろう。

角を曲がると戦闘員も出てきそうな扉もなく、実際通ってみても一人も現れなかった。

さらに進むと扉があった。それを蹴り開けて進むと、広い踊り場の2階に出た。2階は誰もいなかったが1階では銃撃戦が行われていた。

しばらくすると1階の戦闘員も全滅し、ハルさんが部屋の中央付近に躍り出た。声をかけようと思ったその時、後ろから迫る敵影があった。

俺は手すりを超えて1階へ飛び降り、戦闘員の頭上に刀を立てて着地する。

「後ろを疎かにしちゃダメじゃないですか」

「君が来てくれると信じてたからね」

（おしゃべりはそこまでだ）

二人が周囲を警戒する。むこうの扉が開け放たれ、二人の男が現れた。

「俺達は金狼・銀狼」

「ここまで来るとはなかなかやるな、だが二人とも俺たちの前にひれ伏すのだ」

パパパパパパパパパパ――――!!

ハルさんが挨拶代わりにとマガジンに残っていた全ての銃弾を二人に浴びせる。

「遅い！」

二人は驚くべき反応速度と身のこなしでそれらをかわしてしまう。

「この程度か。ならば・・・次はこちらから行くぞ!!」

二人は急加速して肉薄し、加速した勢いを拳に乗せ俺達にぶつける！

――ドガッ！ガララ・・・

俺達は壁に激突する。その際の衝撃で壁が崩れ落ち辺りは砂埃に包まれる。

「所詮、この程度か」

「跡形もなく砕け散ったな」

――スパッ

俺は気付かれぬように片方の背後に立ち、首を切りつける。

「金狼！！」

「おやおや、他人の心配をしてる場合じゃありませんよ？」

ハルさんはもう片方のこめかみに銃口を突き付けてそう言った。

「しまっ・・・」

――パァン

「あーあ、帰ったらマナミに洗濯してもらわないと」

「マナミちゃんもこのこと知ってのかい？」

「知りませんよ。夜にバイトしてるって誤魔化してます」

「彼女も黒武者姓なんだから、別に隠さなくても…」

「知らない方が幸せじゃないですか、こんな血生臭い人たちのことなんて」

「・・・・・・・。」

「そういえばハルさん、先生やってるんだったら『委文（しどり）　正義（まさよし）』って生徒、知りませんか？」

「……知ってるよ。君達に負けず劣らずの珍しい苗字だったし」

「今どうしてるかご存知ないですか？」

「今は……刑務所にいるだろうね」

――――！！！！！！！

「どこですか、どこの刑務所ですか！！」

「ぼ、僕もそこまでは知らないよ…。どうしたんだい、そんなに血相を変えて」

「いえ…お世話になった先輩ですから、信じられなくて…」

「そうだったのか…」

「随分とシラケてしまいましたね…じゃ、ハルさんが持ってるそのＣ４でパッとやりますか！」

「あ、バレてたんだ。それじゃ、半分あげるから適当に仕掛けてきてよ」

それからまた二手に分かれて屋敷のいたるところにＣ４を仕掛け、外の庭で合流した。

「それじゃ、今日はこれでおしまいかな」

「そうですね」

二人は楽しく談笑をしながらそこを後にした。爆発によって瓦礫と化した屋敷を背にして――

――翌日・学校――

「おっ、守君」

「あっ、先生」

「意外と元気そうだね、昨日の今日なのに」

「慣れてますから」

身近な同業者（2）（後書き）

作者「今回の更新はここまでです。いかがだったでしょうか
　以下は様々な登場人物たちが会話をします。読まなくてもストーリー上は（恐らく）差支えありませんが、こちらも読んでいただければ嬉しいです。」

遠野「まさか守君が委文君の知り合いだったとはね」

守「昔にいろいろあったんですよ」

遠野「ということは、マナミちゃんも知り合いなのかい？」

守「あー…、まー…、そう、ですね…。でも覚えてないと思いますよ」

遠野「まあ覚えてないのも無理ないか」

守「それよりも先生、正義さんがムショにいるってどういうことですか？」

遠野「悪いけどそれは教えられない、個人の事だし」

守「わかりました。じゃあ他をあたります」

遠野「ところで守君」

守「なんですか？」

遠野「君はもう1年高校生を延長するつもりかい？」

守「い、いや！あれは……」

遠野「期末の結果によっては、夏休み返上になっちゃうから頑張ってね」

作者「えー、次回は『デートの約束』に続きます
また屋上で、何かが起こる！」

デートの約束

――後日・昼――

「「いっただきまーす！！」」

一年生たちの言葉を合図に食事が一斉に始まる。

「そういえばリサちゃんってコンビニ弁当が多いよな」

「また親とケンカしちゃいまして…」

「大変だねぇ。そのうちうちに泊まりに来たりするんじゃない？」

「行ってもいいなら行きますよ」

「え？この前リサリサ来た・・・ッ！」

（そのことはいいの！）

「リサちゃん、マナミの口を押えてどうしたんだ？」

「あ、いや、マナミちゃんの口にご飯粒がついてたんで取ってあげたんですよ！」

「あっ、そうだ。お兄ちゃんに報告することがあるの」

「報告？中間テストで満点でもとったか？」

「んーん。あのね…マナミ今年の野球応援でチアやることにしたの！」

「そういえば立候補してたねー」

「チアねぇ…。立候補したんだったら文句は言わないけど…」

「あれ？あんまりうれしくなさそうですね、センパイ」

「あー、うん…まあな」

「なんで？お兄ちゃん」

「だってチアガールって人前で足上げたりするんだろ？兄としてはちょっとなぁ……」

「大丈夫ですよ、先輩。野球応援のチアじゃあそんな動きはないですから」

「え、ないの？」

「守君は応援に行かないから実際の動きを知らないのよ、ね？」

「え？先輩、野球応援行かないんですか？」

「『行かない』っつーか『行けない』んだね。俺はお留守番っていう役目があるから」

「守たちがお留守番してくれてるからウチの学校は一回戦から全校応援なのよ、感謝しなさい」

「律っちゃん、それ、俺が言う台詞だから。……まぁそういう動きがないんだったら、いいか」

「そうそう。それにお兄ちゃん、心配しなくてもちゃんと当日はブルマか見せパンだから！」

そういってスカートの裾を掴み、たくし上げる。

……ん？対策をするのは試合の日当日だから、今日は・・・

「マナミちゃん、スカートおろしておろして！！」

「ふえ？・・・・・・あっ！／／／」

マナミがあわててスカートを戻す。他の何人かは陸の目を押さえていた。俺は兄という身分もあって目隠しされなかった。

すぐさま俺は「許せ陸！」と言ってボディブローをズドンとぶち込む。食後だったので食べたものが出やしないか心配したが無事気を失ってくれた。

「ふう。これでさっきのことは覚えていまい」

マナミはというとマナと一緒に律っちゃんとサキちゃんに説教をしていた。おそらくさっきのを画像として保存しようとしたんだろう。

「それから…お兄ちゃん！」

「は、はいっ！」

突然俺にも矛先が向けられる。この前の二の舞だけは避けないと！

「お兄ちゃん…見たよね？」

「あ…あぁ。すまん」

「謝らなくていいよ！さっきのは…その……さ、サービスショットだから／／！今日は『兄の日』だし！！」

ということだそうで、何はともあれお咎めなしで一安心だ。

「いやーヒドイ目に遭ったわ」

「ご苦労なこった」

「誰のためにやったと思ってるのよ！」

「わかってるって、だから今買い取りに来たんじゃないか」

俺は財布から万札を出し、律っちゃんに渡す。

「今回は随分と体を張ったようだし、画像の希少度も加味してそれで買うよ」

「フフ…、流石守ね。これが例のフィルムよ」

フィルムを受け取った俺はいつもの集団に戻っていった。

「そういえばアタシの調べによると、遠野先生は何かアヤしい副業をやってるらしいわ」

「えっ、とーちゃん先生が！？」

この前仕事で一緒だった『ハルさん』こと『遠野（とおの）　遥（はるか）』は表向きは学校の先生をしていて、マナミ達のクラスの担任で、俺らの物理の

担当でもある。なかなかのイケメンで、女子の間では親しみを込めて『とーちゃん先生』と呼ぶのが主流らしい。

「アヤしい副業って何なの？」

「そこまではわからないわ。でもあの若さで副業もなしであんな高級なスポーツカーに乗れるはずがないわ」

「家が裕福だとか？」

「ないわね。もしそうだったら教師なんてしてないわよ」

「お兄ちゃん、何か知らない？」

「さぁ？知らないな」

さすがに同業です、なんて言えないからな。

「そっか。夜のバイトで見かけたりしてないかぁ。。」

「「「夜のバイト！？」」」

全員の視線が俺に集められる。

「先輩、そんなことやってたんですか！」

「生活が苦しいのかもしれないけど、それはダメだよ！マモル君！！」

「待て待て待て！夜『の』バイトをしてるんじゃなくて、夜『

に』バイトしての間違いだ!!」

・・・・・・。

「そうですよね。先輩が水商売やってるわけないですよね」

「チェッ、つまらないわね」

「でもセンパイ、バイトをしていること自体は否定しないんですね？」

「あぁ。事実だし」

「そんなこと公言していいのかしら？ユキが黙ってないと思うけど」

「・・・・・・ハッ!!」

そうだった。ウチの学校は学校の許可がないとバイトできないんだった!俺はもちろん許可なんてとってないから風紀員たちにばれたらマズいことになる!

「大丈夫だよ、クロム。ユキちゃんには言わないから」

「私達も絶対に言いませんから!」

「もちろんマナミもだよ!」

「アタシ達はどうしよっかしら？ねぇ、サキ？」

「そうですね～」

やはりこいつらが立ちはだかるか、こうなれば買収するしか…

「律っちゃん、それだと新聞部の部費が減ることになっちゃうけどいいかな？」

「えっ！？そ、それはちょっと…」

さすが生徒会長、その権限を使えば特定の部の部費を雀の涙ほどにできるのだ！

「じゃあ、黙っててくれるよね？」

「…しょうがないわね」

「よかったね、マモル君。みんな誰にも言わないって」

「そうしてもらえると助かる。それとマナ、ありがとうな」

「わ、私はただ当然のことをしただけで、お礼なんて、そんな……／／／／」

語気が弱くなるのに反比例して顔の赤みが強くなっていく。

「あっそ、じゃあ今のナシね」

「えっ！？」

「冗談、感謝してるって」

「もぉー、マモル君のいじわる！！／／／」

「悪い悪い。気になる異性には意地悪したくなる性質でな」

「い、今なんて言った？」

「さぁて、忘れちまったな」

「ねえマナミちゃん、先輩って女殺し？」

「…かも」

「そうそう、この前５人で行ったラーメン屋だけど、結構人気が出てきたみたいよ」

「やっぱ律っちゃんの記事の影響はでかいなぁ」

「当然よ！」

「ねえマモル君、５人って誰？」

「俺・マナミ・律っちゃん・ハギ・ケイ、の５人だな」

「…私は？」

「…誘おうと思って生徒会室までは行ったんだがな、なんか忙しそうだったから諦めて引き返したんだ、悪いな」

「そうだったんだ…私も行きたかったなぁ」

「そう言うなって、ちゃんと代わりを用意してあるから」

「代わり？」

「今週の土日のどっちか、俺とどっか行かないか？」

「え？それって…」

俺は照れ臭そうにそっぽを向き、頬をかく。

「それしか思いつかなくってな・・・どうだ？」

「もちろん行く！」

「さすが守、普通の人にはできないことを平然とやってのけるわ」

「そうですか？」

「…何人もの男共が彼女にアタックしたけど全滅だったのよ」

「そこに痺れる、憧れるぅぅぅぅ！」

「リサリサ、どうしたの？」

「…ごめん、言ってみたかっただけ」

「お兄ちゃん、マナミは行っちゃだめなの？」

「そう…だな。一応マナとのデートだし」

「で、デート！？」

マナが驚く。

「え？そうだろ？」

「はわわわわ……／／／」

マナはなんというか…茹で上がっていた。

「えー、マナミもお兄ちゃんとデートしたい～～！！」

「それじゃあ…マナとデートに行かない方の日は、お前とデートってことにするか」

「うん！」

その後マナとマナミが話し合った結果、土曜日にマナミと、日曜日にマナとデートということになった。

「ウチの学校の2トップ相手に二股かけるとか、アナタ前世はギャルゲの主人公とかだったんじゃない？」

「さあな、ところでそれは嫉妬か？」

「違うわよ」

デートの約束（後書き）

守「今週末は出費が多そうだな。ちょっと下ろしておくか」

星野「手持ちで何とかなるんじゃない？」

守「マナミがここぞとばかりに買い込むだろうからな。
…つか星影、お前出てくるの早すぎ。まだ本編で出てきてないだろ」

星野「別にいいじゃない。どうせここは本編と無関係なんだし」

守「いいわけあるか！帰れ帰れ」

星野「昔と変わらず厳しいわねぇ（ぶつぶつ）」

守「油断も隙もあったもんじゃない」

オニ「まったくね」

守「オニさん、アナタもです」

作者「今回の更新はここまでです。いかがだったでしょうか

さて、ここでお知らせがあります。」

マナミ「おしらせ？」

作者「私事で申し訳ないんですが、しばらくの間、暇を取らせていただきたく思います」

マナミ「えっ！？」

守「理由（わけ）を聞かせてもらおうか」

マナミ「まぁまぁお兄ちゃん、私事って言ってるんだし細かいことを聞くのはやめとこ。ね？」

守「マナミがそういうなら…」

作者「というわけですので、しばしの間お別れです。それでは！」

依頼（前書き）

お久しぶりです。

お休みを頂いてからおよそ一か月、ちょっとずつ書き溜めてきたので、今年度末まで（※）の間ですが再開します。

※年末もまたネット環境のない実家に帰るためです。

依頼

――放課後・神社――

「あら、珍しいわね」

時間帯が時間帯だが今日も神社に人姿はない。この神社でハレの日以外で参拝客を見たことがない。大丈夫なんだろうか？

「ちょっと用事がありまして」

「なにかしら？」

「いえ、綾さんにじゃなくて、オニさんにです」

「私にか？」

綾さんの後ろで気ままに漂っている霊体が反応する。霊と断言するとへそを曲げてしまうので、俺はオニ（鬼）さんと呼んでいる。

そんなオニさんがゆっくりと地上に降りてくる。

「それで、用事って？」

「今週の日曜日に出かける用事があるんですけど…留守を頼めませんか？」

「そういうのはガラじゃないんだけど……、まぁいいわ。君の妹に

は興味あるし」

「ありがとうございます」

深々と一礼する。

「ただし！！」

「ただし？」

「私もその日ちょっと用事があるから実際に留守番をするのは私の分身になるけど構わないかしら？」

「有事の際にはちゃんと本体が来るのであれば…」

「その時はちゃんと対処するわ」

「なら問題ありません」

――同日・おやっさんの事務所――

「仕事以外の用で来るとは珍しいな。私のコレクションが欲しいのか？」

「違いますよ。おやっさんのその広い人脈を使って、調べてもらいたいことがあるんですよ」

この世界に長くいるだけあって、おやっさんの情報網はかなり広い。その気になればごくごく一部の人しか知らないような国家機密でさえ知ることができるらしい。

「それで、私は何を調べればいいのだ？」

「『委文　正義』という男の居場所をお願いします」

「『委文』、か…。珍しい苗字だから割とすぐ見つかるだろう。他に情報はないのか？」

「俺の調べによると、現在服役中だそうです」

「そうか、それだけで十分特定できるだろう。野暮なことを聞くが、君とはどういう関係があるのだ？」

「マナミの本名は『委文　真奈美』です」

すぐにおやっさんは俺の言わんとすることを察した。

「そうか、そういうことか…。それなら協力しよう、君達のためだ」

「ありがとうございます。それから、このことはくれぐれも内密に…」

「もちろんだ、わかったらこちらから連絡する」

「よろしくお願いします」

依頼（後書き）

作者「短いですが、今回はここまでです」

律「守がマナミちゃん&マナと連荘デート…これは尾行するしかないわね！」

沙希「ですね、師匠！」

律「アナタももちろん行くでしょ？」

沙希「す、すいません。どっちも予定が入ってまして…」

律「せめてどっちかは空けておきなさいよ、急だから仕方ないけど」

沙希「でも師匠、実は日曜日の用ってのはですね…」

ゴニョゴニョゴニョ・・・

律「なるほどね。それならそっちで行動しなさい」

沙希「ハイ。何かあったら連絡します」

律「わからないことがあった時も連絡ちょうだい。力になれると思うから」

沙希「了解です、師匠」

マナミとデート（1）

――土曜日――

「それじゃ、行くか」

「うん！行こ、お兄ちゃん」

マナミの手を握り、家を出る。

「それで、今日はどこに行くんだ？」

「ん～…まずはゲーセン行こ！！」

――ゲームセンター――

ワイワイ、ガヤガヤ――

「ここはいつ来ても騒がしいなぁ…」

「ここはこーゆーとこなの、お兄ちゃん、もしかして初めて？」

「いや、初めてじゃないけど…2，3年ぶりだな。それまでは結構

通ってたけど」

「ふぇ～」

「おっ、このシリーズまだやってんのか」

ゲーセンの中を歩いていて俺の目に留まったのはとある格闘ゲームの筐体。

勝ち抜き戦をやっているらしく、人だかりの向こう側ではチャンピオンらしき人物が次の挑戦者を待っていた。

「よぅチャンピオン、次いいか？」

「あぁ、来なよ」

――――数分後

K．O．

「……。」

チャンピオン（元）は全くの想定外の出来事に言葉を失い、魂の抜け殻状態だった。

ざわ・・・ざわ・・・

「すごいねお兄ちゃん！」

「でも久しぶりだったからな、さすがにパーフェクトは無理だったな。コマンドが大きく変わってたら危なかったな」

「新チャンプの誕生だ！」

「しかもチャンプ相手に2回とも余裕勝ちとか何者だ！？アイツ」

「それに付添いの子『お兄ちゃん』とか言ってたぞ！」

「何だ何だ、ケンカか！？」

騒ぎを聞きつけて奥の事務室から海坊主・・・もとい、ゴツいおっさんが出てくる。

「おー、懐かしい人が出てきたな」

「あん？誰だお前は？」

「お兄ちゃん、この人と知り合い？」

「もちろんだ。なあ、あの時の記録って結局どうなったんだ？」

「そんなものは知らん」

「あれから3年近く経つしな…忘れられてもしょうがないか。『前

人未到の８９連勝』も今は昔、か」

「「「「なに……」」」」

ギャラリーの見る目が変わる。どうやら知名度は結構あったようだ。

「あの伝説の…」

「でもそれならさっきの結果も納得できるな」

「だがその記録を樹立した奴はもっとツッパってたぞ。お前さんみたいな好青年とは似ても似つかんな」

「…しょうがないな。オッサン、１００円よこしな」

「それでどうしようってんだ？」

「お前らにワンコインの夢を見せてやるよ」

「お兄ちゃん、そのセリフはちょっと…」

マナミは吹き出しそうになるのを必死でこらえていた。

「そ、そのクサい言い回し…お前があの時の…」

「さっきからそう言ってるだろ」

「そうかそうか、お前が！あのころはだいぶヤンチャしてたのに更生して立派になったな・・・」

オッサンは一人で勝手に泣き出した。やっぱり年を取ると涙腺がもろくなるようだ。

「で、それはいいから俺の記録はどうなったのか教えてくれよ」

「抜かれるわけないだろ、あんな記録。新台と入れ替えになるまでずっと健在だったよ」

「それを聞いて安心したよ。じゃ、俺らはいろいろと見て回るから」

「あぁ、楽しんでいってくれ」

「お兄ちゃん、どうして連勝記録止まっちゃったの？」

「邪魔が入ってゲームを続けられなくなったんだよ」

「え？もしかして…ユキ先輩？」

「そ」

――3年ほど前――

「ッしゃあ！」

「また勝ったぜ、アイツ。これで何勝目だ？」

「たしか89勝目だ。つーかこれ難易度『狂気（ルナティック）』だろ？俺なんて1勝もできないぜ」

「お前ら、まだまだ夢の続きが見たいよな！？」

「「いぇーーーい！！」」

「よーし、上出来だ。とりあえずは3ケタ勝利を目指して…」

ピーピピピピ！！

警笛の音が響き渡る。そして音のした方から俺に向かって人の海が切り開かれる。

「見つけたわ、黒武者守！あなたを『遊戯施設の出入り』の現行犯で逮捕するわ！！」

「なんだなんだ」

「ゲーセンに出入りしただけで逮捕だってよ」

「ざけんじゃねえよ。俺はあいつの記録がどこまで行くか見てえんだ。邪魔すんじゃねえ」

「黙りなさい！！」

まさに鶴の一声。一瞬でその場が静まり返る。

「マジメだねえ、ユキちゃん。なんでそんなに俺をしつこく追いかけてくんの？」

「あなたを一度も逮捕したことがないからよ」

「なるほどな、だが大人しく捕まってやるつもりはないんでな！」

そして俺は人ごみの中へと消えていった。

「こら！待ちなさい！！」

そして二人はその場から姿を消した・・・

「…ってなことがあったんだよ」

「ほえ～、そんなことがあったんだ」

「そのせいでか今でも優先的に追っかけてくるんだよ」

「でもさすがに今は…わわっ！」

突然止まったためマナミは俺の背中にのめりこむ。

「あったかい・・・じゃなくて、お兄ちゃん！いきなり止まらないでよ！」

「悪い、風紀員が警邏してるのが見えたからな」

「けーら？」

「パトロールのこと」

「見つかっちゃったら大変じゃない？」

「大丈夫さ、見つからなければいいんだから」

「あ、そっか。じゃ他行ってみよ！」

マナミとデート（1）（後書き）

マナミ「昔のお兄ちゃんってこんな感じだったんだね」

守「できれば忘れてくれ…、黒歴史だ」

星野「私が向こうにいたころの守はあんなのだったのね…」

守「まぁな。…って、お前は出てくるなって前にも言っただろ」

マナミ「お兄ちゃんがけーはぎ先輩と仲良くなったのもこの頃なの？」

守「まぁ…そうだな。ゲーセンで何度か会ったこともあるし」

マナミ「ユキ先輩との因縁も？」

守「因縁…っつーか向こうがしつこく追いかけてくるだけ」

マナミ「じゃあマナ先輩と知り合いになったのも？」

守「マナとの付き合いはもっと長いな。幼馴染だし」

マナミ「ねぇお兄ちゃん、『幼馴染補正』ってあるの？」

守「なっ！？」

マナミ「この前サキちゃんから聞いたんだけど…ホントなの？」

守「ない…ことはないな」

マナミ「やっぱそうなんだ…」

守「でもお前には『妹補正』があるからそれでおあいこってとこだな」

マナミ「ホント!?うれしい!!」

オニ（色男も大変だな）

守（せっかくいい感じになってたのにぶち壊さないでくださいよ）

マナミとデート（2）

「ねぇお兄ちゃん、プリ撮ろ？」

どうやらプリント倶楽部のコーナーに目が行ったらしい。

写真とかに姿を残すのは本当は嫌なんだが他ならぬマナミの頼み、今回は特別に撮ることにした。

お金を入れると機械のアナウンスが入る。そのアナウンスとマナミによると、写真は何枚かとるらしい。

最初の一枚は普通に撮った。次は友達みたいにマナミと肩を組んで撮った。

他にもダンスのペアみたいにしたり、変顔をしてみたりいろいろなバリエーションで撮影した。

「お兄ちゃん、次で最後だよ」

「ん、もう終わりか。じゃあ最後は…」

ひょいっとマナミをお姫様抱っこの形で抱き上げる。

「えっ!?ちょ、ちょっと、お兄ちゃん!?」

「どうした?ちゃんとカメラの方見てないとダメだぞ」

「〜〜っ／／／」

「次は撮ったプリに書き込んでくの」

ペンをつかってモニタ上の画像に好き放題にかくそうだが、何を書いたらいいのかわからない。そこでとりあえず自分のサインを書いてみた。

「サインとか、お兄ちゃんカッコいい!」

マナミも自分のサインがあるらしく、俺のサインの近くに自分のを書いた。

そのあとはヒゲを書いたり、吹き出しを入れたりいろいろした。ほとんどやったのはマナミで俺は見ていただけだが。

そして最後の一枚、お姫様抱っこの奴だ。

マナミはモニタを見ただけで真っ赤になって書き込む余裕はなさそうだ。

そのままでもよかったが一応俺に『執事』と、マナミに『お嬢様』と矢印を引っ張った。

そしてプリクラがでてくる。

携帯に画像を送信することもできるらしいが長くかかりそうなので俺はしなかった。マナミはみんなに送るとか言って携帯に転送していた。

そのあとはホッケーで対戦した。結果は2勝2敗でマナミは勝ち越せず悔しそうだった。

二人で協力してガンシューティングもやった。クリアしたものの実戦とリンクしてしまい、時々変な動きしてたとマナミに言われてしまった。

「お兄ちゃん、次はあのＵＦＯキャッチャーやろう！」

「まかせとけ、景品をかっさらってやる・・・と思ったが、もう１００円玉がないな」

「あっちに両替機があるよ」

「じゃあちょっと崩してくるからここで待ってろよ」

「は～い」

ヴィィィ…ジャラジャラジャラ

先を見越して１０００円札を2枚ほど投入し、２０枚の１００円玉が取り出し口に吐き出される。

小銭を回収しようと手を伸ばしたその時――腕を掴まれた。

掴んだ腕の方を見ると『風紀委員』と書かれた腕章が目に付いた。

「なんだ、風紀委員か。さっき通路を見たときにはいなかったはずだが」

「隠れてたんですよ。『ゲーセンなら一度は両替機に行くはずだか

らそこを狙え』とユキさんの指示がりまして」

「そしたら見事に俺がかかったってわけか」

「はい。ちなみにユキさんには既に連絡をしましたからもう来ると思いますよ」

「…それマジ？」

「マジです」

「じゃあ長居は無用！」

掴まれていない方の手で手刀を振り下ろし、自由になる。急いでその場を離れ、マナミの元へ走る。

「ど、どうしたのお兄ちゃん！？」

「すまん、風紀委員に見つかっちまった。逃げるぞ！」

「う、うん！」

階段を駆け降り出口へまっすぐ向かう。自動ドアを超えたその先には――

「いらっしゃいませー♪」

ユキちゃんがいた、やはり先を越されていた。

「あちゃー…。何とか間に合うと思ったんだがな」

「ついに年貢の納め時が来たわね守、大人しくお縄を頂戴しなさい！！」

「却下」

そう言ってマナミよりも2，3歩前に出る。

「相変わらず強気ね。でもこれを見てもそう言えるかしら？」

ユキちゃんが指を鳴らすと物陰から風紀委員の腕章をつけた生徒が姿を現す。困ったことに何人かはトンファーやらさすまたやら武装していた。

「これはまた大層なお迎えだな」

「当然のことよ。なんたって守が相手だもの」

「ホントその勘と手回しの良さはオヤジさん譲りだな。元気にしてるか？」

彼女の父親は県警のトップで現役の頃は毎年のように表彰され、紙面にもよく名を載せていたらしい。

「パパは元気よ。それよりも少しは今の状況を考えたらどうなの？」

風紀委員の平どもが身構える。ユキちゃんの合図ひとつで一斉に襲い掛かってくることだろう。

「いつもよりちょっとばかし多いだけだろ？」

「妹さんがいるでしょ。いくら守といえど妹さんを守りながらこれだけの人数を相手にできるかしら？」

「…待て。”協定”を忘れてないか？」

俺と風紀委員の間には協定が結ばれている。

一、俺相手には罪状・抵抗の如何に関わらず武器を使用してもよい

一、俺を捕まえるために罪のないマナミを人質にしてはならない

一、俺を捕まえるのも基本は現行犯のみとする

「わかってるわよ。でもそれは『罪のない』妹さんでしょ？」

「ちっ…」

「今回は妹さんも遊戯施設の出入りの罪を犯しているのよ、だから人質にしても問題はないわ」

「さすが、粗探しも上手なこった」

「ユキさん、恐縮ながら意見があります」

「何かしら」

「今回の場合、妹の捕縛の際にも武器を使用すべきです」

「何だと？キサマ…」

俺は露骨に不快感を示す。

「まあ待ちなさい。彼の意見を聞いてみましょう」

と、ユキちゃんは俺を制して提案者に話を続けさせる。

「先ほどユキさんが仰った通り、私たちは彼の妹を人質にとることができますが、彼が阻もうとするのは目に見えています。

そして彼相手には武器を使って取り押さえることには同意が得られています。」

「成程。武器の使用が許可されている守が相手になるのがわかっているのに、素手で立ち向かうのは余りに無謀、というところかしら」

「はい」

「じゃあ聞くけど、もし守が武器を使った私たちの攻めを防ぎきれなかったらどうなるかしら」

「妹に当たる…かもしれません」

「そうね。それでもし妹さんに傷跡をつけてしまったらどうするの

？」

「・・・・・・。」

「それに顔に当たってごらんなさい、女性にとって顔の傷は一生の傷なのよ！！」

提案した者は言葉を失った。さらにそこへ俺が追い打ちをかける。

「わかったならさっさとさっきの発言を撤回しろ、さもなくばキサマを病院送りにする」

「で、できるものならやってみろ！そうすれば停学は確実、ともすれば退学だぞ！？」

「それがどうした」

「た、退学だぞ！退学が怖くないのか！？」

「だから、それがどうしたんだと言ってるんだ。別に俺が死ぬわけではない、ならば退学なぞお前のような輩からマナミを守れるための代償と思えば十分安い！！」

近づき、肉薄する。中高の6年間一緒だったユキちゃんにはこれが冗談や脅しではないことはわかりきっていた。

「その辺までにしておいてちょうだい。これは教育が不十分だった私に責任があるわ、ごめんなさい」

割って入り、頭を下げる。

「ゆ、ユキさん、そんなことしなくても…」

「今この場を持ってあなたを風紀委員から除名します。早くどこかに行きなさい」

「ま、待ってください！僕はただ…」

「失せろ！！」／「消えなさい！！」

そして逃げる様に去って行った。

「お兄ちゃん…」

マナミが心配そうな目で俺を見つめる。

「心配するな。ちょっと害虫を駆除しただけだ」

どうもさっきの一言が効いたらしく、ちょっと怯えているようだった。

そこで、マナミの胸に手をやった。

「ちょ、お兄ちゃん!?／／／」

長いことやってると怖いので手を放す。

「お兄ちゃん、スケベ!!」

「そう怒るなよ。おかげで俺もお前もいつもの調子に戻れたんだから」

少しの空白があってマナミが「あっ」と反応する。これでこっちは大丈夫だろう。

「そういうことは家でやってくれない?」

「すまんな、とりあえずいろいろあったから今回は見逃してくんない?」

「それとこれとは別よ」

「ちぇっ、ケチだな。…じゃあマナミ、逃げるぞ」

「どうやって?」

「こんなこともあろうかと、準備は万端なのさ」

足元で煙幕弾を炸裂させる。あたり一帯は煙に包まれ、俺も含めて全員が視界不良になった。

「ゴホッ、ゴホッ…っ総員！近くの者と手を組んで脱出できるような隙間を作らないで！！」

さすがユキちゃん。こういう事態も予測して取るべき対応ができている。でも残念ながらそれじゃダメなんだな。

俺は再度マナミをお姫様抱っこし、縁やわずかな隙間を利用してゲーセンの建物の屋根の部分まで登り上がる。

そして煙幕の中でも俺を逃すまいと奮闘するユキちゃんたちを尻目にその場を後にした。

マナミとデート（2）（後書き）

オニさん「ずいぶんと物騒なものを持ち歩いてるのね」

守「備えあれば憂いなし、ですから」

オニさん「その様子だと学校生活もなかなかスリリングじゃない？」

守「まぁそうですね。でも遠野先生の比じゃないですよ」

オニさん「彼は通勤してる車の中に銃火器を仕込んでるからねぇ」

守「オニさんも知ってましたか。でもそれだけじゃないですよ」

オニさん「というと？」

守「先生の持ってる腕時計やペン、その他諸々には麻酔銃の機能を兼ねてるものがあるらしいですよ」

オニさん「へぇ…。やっぱり見ればわかるものなの？」

守「どうでしょうね。あくまでも『らしい』の話ですから」

オニさん「そうね。でもそれなら何かソースがあるんじゃないの？」

守「ありますよ。いつもうるさい生徒が先生の授業に限って寝ていたりするみたいですね。俺もあの授業だけは妙に眠くなりますし」

遠野「そんな調子じゃ留年だよ？」

守「縁起でもないこと言わないで下さいよ…って、遠野先生！」

オニさん「噂をすれば、というやつね。で、噂は本当なの？」

遠野「半分本当、半分嘘、ってとこだね」

マナミとデート（3）

「ふぅ…ここまで逃げれば大丈夫だろ」

マナミをおろし、ちょっと休憩する。

「お兄ちゃん、今何時？」

時計を見て「1時前だ」と答える。

「じゃあお昼食べにいこ！」

「どっかアテがあるのか？」

「もちろん！お兄ちゃん、早く早く！」

マナミが俺の手を引っ張り進んでいく。

――15分後

「着いたよ、お兄ちゃん」

目の前の建物の名前を見る。お好焼・・・焼焼(やきやき)？

なんて読むのかわからんが焼の字が3つ連なっていて目立つだろうな。

ガラガラガラ――

「いらっしゃいませー。あ、マナミちゃん、それに先輩！」

「やっほ～」

「よっ。近くまで来たから食べに来たぜ」

「それじゃ、空いてる席にどうぞ」

そう言われたのでテレビのよく見える座敷席に座った。

「ねえお兄ちゃん、さっきのコ誰だかわかる？」

「あぁ。屋上のメンバーの一人だろ」

「なんて名前だったか覚えてる？」

「さすがにそこまでは覚えてないな。でもお前が”みーちゃん”って呼んでるコだろ？」

「よかったねみーちゃん！お兄ちゃんみーちゃんのこと覚えてたよ」

たまたまお冷を持ってきたみーちゃんに自慢げに言う。

「マナミはみーちゃんって呼んでるけど、名前なんていうの？」

「金谷（かなたに）　瑞姫（みずき）です」

「いい名前だ。あ、俺豚玉、トッピングでチーズ追加しといて。それとやきそば」

「マナミはいつもの！」

ポケットからメモ帳を取り出し、そこに俺たちの注文を書き留めていく。

「あぁそうだ、そっちで焼いて持ってきて」

「かしこまりました」

一度奥へ戻り、カウンターの向こう側に出て調理を始める。

「なんか通っぽかったよ、さっきの」

「自分で焼くのが面倒だっただけさ」

待つこと数分――

「お待たせしました！」

鉄板の上でジュージュー音を立てているお好み焼きが運ばれてくる。

焼そばもそれに遅れて運ばれてきたが、マナミにいくらかあげるとこを見越してか、小皿もついてきた。

「それでは、ごゆっくりどうぞ」

俺達に一礼して他の客の対応に向かう。俺はしばらくその動きを見ていた。

「ふーん…」

「ちょっとお兄ちゃん、どこ見てるの？」

「いやなに、ちょっと観察を、ね」

「へぇ～、それで何かわかったの？」

やけに突っかかってくるマナミ。ヤキモチか？

「まあな。それは後で教えてやるとして、食べようか」

「ちぇーっ」

口を”3”にして不満そうなマナミ。

「別に変な目で見てたわけじゃないんだからいいだろ？」

「じーーー」

疑いの目で見てくる。

「心配すんなって。お前がいれば他の女子を変な目で見る必要はないんだから」

事実、俺は女子をそういう目で見たことはない。周りの会話に合わせるためにいろいろ言ったことはあるが。

「お、お兄ちゃん、それって…／／／」

逃げ口上のようにマナミを赤面させることを言っているようだが、本心から思っていることである。

ちなみに真っ赤になったマナミはお好み焼きの鉄板以上に熱くなっていた。

――――食後

「ふー。食った食った」

「マナミもおなかいっぱーい」

「それじゃ、観察の成果を試してみますか。…みずきちゃーーん！」

「はーい！」

俺に呼ばれて奥からみずきちゃんがでてくる。

「突然だけどみずきちゃん、……高校に入る前からバスケやってたよね？」

「は、はい…そうですけど。マナミちゃん、私が中学からバスケやってるって言ったっけ？」

「んーん、マナミも知らなかった」

「さっき客とすれ違う時に見たんだけど、相手に背中を向けてすれ違ったよね？」

「…あっ！」

みずきちゃんは俺がどうしてわかったのか理解できたようだ。

「お兄ちゃん、どーゆーこと？」

マナミはわかってなかった。バスケ部じゃないから仕方ないけど。

「バスケで一対一の時は相手を背後に位置させることが大事なんだよ、ボールが扱いやすかったりするから。

で、そういう動きをきっちり叩き込まれるわけ。だから無意識のうちに背中を向けてすれ違ったんだよね？」

「そう…ですね。さすが先輩です！」

「でもそれだったら高校からバスケ始めても同じじゃない？」

「流れがスムーズだったからな。入部したての奴にそんな動きはできないだろうと思ったんだよ」

「ほぇ～。」

「先輩もバスケやってるんですか？」

「全然」

「じゃあなんでそこまで？」

「それは秘密」

「それで、いくら？」

「合計で２１００円になります」

「ほい、これで」

財布から１０００円札を三枚だし、みずきちゃんに渡す。

「はい、９００円のお返しです」

「ん、ありがと。美味かったぜ、お好み焼き。それじゃ、また学校でな」

「ばいば～い」

「ありがとうございましたー！！」

ガラガラガラ――

「さーて、腹ごしらえも済んだことだし…」

「済んだことだし？」

「買い物に行くか」

「ホントに？やったぁ！！」

マナミは嬉しそうにぴょんぴょん飛び跳ねていた。

俺達が向かったのはこの辺りで一番の大きさを持つショッピングモールで、日常的に使うものなら買えないものはないといわれるほどだ。

そしてここはその中の服を扱っている一角。

「お兄ちゃん、どう？」

洋服を自分にあて、俺に感想を求めてくる。

「あぁ、似合ってるぞ」

そうは言ったものの正直ファッションに興味はないしよくわからない。だがマナミはその手のセンスがあるらしく、周りの女子からの評判はなかなかのものだ。

だから感想を求められて適当に似合うといっても何ら問題はないのだ。……本人が知ったら怒るだろうが。

「じゃ、コレ買おーっと」

こんな調子で店をハシゴしていき、二、三時間が過ぎた。
服の買い物に付き合うのも最初の頃は他の客や店員からの目線が気になったが今ではそんなことはない。
「お兄ちゃん、お疲れ様。マナミの買い物は終わったよ」
「あ、あぁ…」
俺の両手にはたくさんの袋、袋、袋、それに加えてこれから食料品を買うというんだから恐ろしい。
…まぁアテは見つけてあるんだがな。
「お兄ちゃんは何か買わないの？」
「俺はいいや、どうせ明日も来るだろうし」
「そっか、明日はマナ先輩とのデートだもんね」

――食料品売り場

大荷物の俺はレジの近くのベンチに座ってマナミが買い物を済ませるのを待っていた。

ちなみにマナミはこういった生活費用の財布と、自分の好きなことに使う個人用の財布がある。

前者を使った場合は用途と金額を俺に報告し、使った分を俺が補填する、というシステムにしていて、常に1～2万円は入っている。

後者はもちろんそんなシステムにはしていないが小遣いを前借したりしないあたり、上手にやりくりしているのだろう。

「お兄ちゃん、お待たせ～」

そうこうしていると俺ほどではないが買い物袋を引っ提げたマナミがやってきた。

「大丈夫か？」

「う、うん…大丈夫」

「本当か？」

「うゅ…ちょっとしんどいかも」

「だろ？ちょっと待ってろ、今助っ人を呼んでやるから」

「…助っ人？」

俺は持っていた荷物をマナミに任せて通路の方へ歩く。

「今回のデートで、守はマナミちゃん以外に瑞姫にもちょっかいを出した、と…」

「もうネタはあがってるぞ、律っちゃん」

「っ！？い、いつから私に！？」

「さぁ、いつからだろうな」

「…私の負けね。いいわ、煮るなり焼くなり好きにしなさい」

「それじゃ、お言葉に甘えて」

しばらくすると、お兄ちゃんが返ってきた。・・・律先輩を連れて。

「待たせたな、助っ人を呼んできたぞ」

「律先輩が？」

「そうみたいよ。それで、なにをすればいいのかしら」

「じゃあこれ、お願いします」

律先輩にさっき買ったものを渡す。お兄ちゃんには洋服の入っている袋を渡した。

「あら、これでいいの？カメラとかを持ち歩くのに比べたら楽ね」

「そりゃよかった。じゃ、俺んちまでヨロシク」

マナミとデート（3）（後書き）

律「お疲れ様。楽しめたかしら？」

マナミ「なんか今回は更新早いねー」

作者「前回が遅れたのでお詫びに早く投稿しました」

マナミ「ふぇ～」

作者「週末にはまた更新しますのでご安心ください」

律「次回ではいよいよ守の家に侵入できるのね…ゴクリ」

星野「それは素晴らしいわね…ハァハァ」

二人「――！」

ガシッ

守「変な同盟結ぶな！それから星影、ハァハァするな！そしてまだ本編で出てないんだから出てくるな！」

星野「まぁそう怒らないで。あとで奉仕してあげるから…ね？」

守「俺に色仕掛けは通じんぞ」

星野「やっぱり見慣れてしまって目が肥えてるのね…」

律「ということは、やっぱり夜な夜な…」

星野「あるかもしれないわね」

マナミ「ところで奉仕って何するの？」

星野「それはね・・・・・ハッ！」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……

律「これはマズイわね…、逃げるわ！」

星野「同じく！」

ダッ×2

守「……」

ヒュン

律&星野「ちょ、本気とかチート過ぎない！？は、話せばわか……」

マナミ「え、え～っと…，次話も読んでね☆」

律、黒武者家を訪れる

――道中――

「しかし珍しいこともあったものね」

「何が」

「守が他人を家に招待するなんて、アタシが初めてなんじゃない？」

「いや、マナが何度か来たことがあるぞ」

「あら、そうなの。でも記者のアタシを入れていいのかしら？」

「どのみちマナミがサキちゃんを家に入れるだろうから遅かれ早かれだ」

「それもそうね。…ところで二人が持ってる洋服、全部マナミちゃんの？」

「そうだが？」

「マナミちゃんってお金持ちなのね…バイトとかさせてるの？」

「んなわけないだろ。小遣い制だ」

「月いくらか聞いていい？」

「マナミがいいって言ったらな」

「マナミちゃん、いい？」

「あ、はぃ。どうぞ」

「許可もらったわよ」

「週３０００円ってとこだな。ちなみに文房具や参考書、その他学校生活で必要なものは俺持ちだ」

「・・・・・・・・・・。」

律っちゃんが絶句する。月額にすると１万は堅い。それが普通よりもはるかに高い額であることは俺自身理解している。

ただ、マナミに金銭的な面で不自由させたくなかったからだ。

そう説明してもやはり律っちゃんはしばらくは空いた口がふさがらなかった。

「それでよく生活やってけるわね。赤字続きなんじゃない？」

「だからバイトやってるんだよ。それに一応黒字だからな」

「嘘でしょ…？」

再び絶句する。しかし嘘ではない。さすがに毎月黒字というわけではないが…

それ以降は律っちゃんの何かしらのセンサーが反応したのかこの話題には一切触れなかった。

「着いたぞ、ごくろうさん」

「律先輩、ココからはマナミが持ちます」

「あら、ありがと」

律っちゃんから荷物を受け取ったマナミは俺達よりも先に家の中へと入っていった。

「まぁあがっていけよ。メシぐらいは出すぞ」

「それじゃ、ごちそうになろうかしら」

「予め言っておくが…」

「何？」

「マナミの部屋には入れさせんぞ」

「わかってるわよ」

「俺の部屋は俺同伴であれば入室を許可する」

「あら、意外と寛容なのね。じゃあご飯の前に部屋を見せてもらおうかしら」

その直後、ドアがけたたましく開け放たれ

「ちょっとお兄ちゃん！！いつまで律先輩を外に立たせてるの！！」

マナミに怒られてしまった。

もう料理を始めているのか、マナミはエプロンをかけていた。制服もなかなかそそるのだがこれはこれでアリだ。

などと見とれていると・・・

「お兄ちゃん！！！！」

さらに怒られてしまった。後が怖いので俺と律っちゃんは急いで家の中に入っていった。

――屋内――

「意外と広いのね・・・」

律っちゃんが驚くのも無理はない。この家は俺が正式におやっさんの組織に身を置くことになったのを機にリフォームしたため、比較的新築に近い状態である。

おやっさんも『両親には世話になったから』という理由で結構奮発したらしく、この家の完全な間取りは俺とおやっさん以外誰も把握できていない。

「まあな。二人で済むにはもったいないくらいだ」

「じゃあ今度泊りに来ようかしら」

「お前とサキちゃんは宿泊禁止だ。どうせ寝顔を撮ろうとか企んでるんだろ？」

「くっ…バレちゃあ諦めるしかないわね」

「妙な計らいはやめるこったな。で、ここが俺の部屋だ」

二階にある俺の部屋の扉を開け、律っちゃんを中に入れる。

「なんか…案外普通ね」

開口一番のセリフがこれだった。

「変な期待するからだ。ごくごく平凡な男子高校生の部屋だろ？」

「そうね…あっ！冷蔵庫があるじゃない」

俺の部屋にある冷蔵庫に興味を持った律っちゃん、期待に胸を膨らませながら開けると…

「なんだ、ここも普通じゃない」

中に入っていたのはお茶とジュースとコーヒー、決してアルコール類は入っていない。

そのあとも律っちゃんは何かネタがあるはずだと室内を探すのだが、特にこれといった収穫がなくて悔しがっていた。

食事までまだ時間があるようなので、冷蔵庫からお茶をだし、律っちゃんをもてなす。

「ありがと。何か話があるのかしら」

「まぁな。明日、俺達についてくるんだろ？」

「そのつもりよ。何か問題でも？」

「いや、ついてくること自体に問題はない、ないんだが…」

「なによ」

「記事にするのはもちろんマナの方だろ？」

「えぇ。兄妹でいちゃついてるとこを記事にするとか誰得なのよ」

「そうか、そうだよな。…ならいいんだ」

――食後

「いやー、やっぱマナミの飯はうまいなぁ」

「弁当もマナミちゃんが作ってるんでしょ？大変ね」

「そうでもないですよ。だってお兄ちゃんのためですから」

さも当然のように言うマナミ。ウチみたいな兄妹は全国的に見ても稀だろうな。

「羨ましいわねー。律をそうなるように調教しようかしら」

「やめとけやめとけ、どうせ変な道に走るだけだって」

「そうよねー。やっぱりやめておくわ」

「それがいい。…さて、俺は皿でも洗ってくっかな」

「あら、意外に家事もするのね」

「マナミに頼みっぱなしってのも悪いからな。これくらいはするさ」
俺は席を立って洗い場に向かい、そして黙々と皿を洗う。

――数分後

皿洗いを終え、俺は二人の元へ戻る。すると律っちゃんが
「それじゃ、アタシはそろそろおいとましようかしら」
「もう帰るのか。もっとゆっくりしていけばいいのに」
「フフ…、もう十分よ。」
「そうか？まあ玄関まで見送ってやるよ」
律っちゃんが玄関へ行く。俺とマナミは見送りに後に続く。
「じゃあマナミちゃん、また月曜に学校で会いましょうね」
「は、はい。また…」
律っちゃんは帰り際に俺の方を見て、声には出さず「また明日」と口を動かした。

俺も「またな」と返したが、その時にはもう律っちゃんは家を出ていた。

「さーて、先に宿題終わらせとくか」

鍵を閉め、明日もあるから宿題を先に片付けようと階段を登ろうとしたその時――

「お兄ちゃん…話があるんだけど」

「ゑ？」

さっきまで三人で楽しく過ごした空気が一転し、重くマジメなものになる。

「それで…話って？」

どんな重大な話なのかと思うとつい固くなってしまう。やっぱりマナミも思春期の女の子、俺がうっとおしいと思い始めたんだろうか・・・。

「さっき律先輩から聞いたんだけど…」

律が情報源？だとするとアイツ、治安維持局やターシャルのことを喋ったのか！？

「あのね？……その……お兄ちゃんって……／／／」

言葉を放つにつれてマナミが俯いていく。そしてその状態からでもわかるほど赤みを帯びる。どうやら俺の心配は空回りで済んだようだ。

「お兄ちゃんって……『ぱんつ星人』なの？」

あまりの唐突さに動きが止まる。まさかそっちの方を攻めてくるとは…。

「ねぇお兄ちゃん、ホントなの…？」

マナミが一心に俺を見つめる。その瞳に蔑みや嫌悪は宿っていなかった。

「…あぁ。本当だ」

しばらく沈黙するマナミ。そしてその後に、

「なんで…、なんで…」

マナミが小刻みに震え始める。地雷、いや、大型地雷を踏んだのはわかっている。だからこの後の反応も予想できる。

「お兄ちゃんのバカッ！！」

予想通り大声で罵られた。次はビンタか腹パン、急所攻撃は勘弁してほしいところだが覚悟を決め、目を瞑る。

「なんでもっと早く言ってくれなかったの！！」

胸部に軽い衝撃。急所と言ってもみぞおちの方できたか。

しかしそれにしては威力が低すぎる。それにさっきの言葉、それにこのぬくもり…。

目を開けてみると、マナミは俺に抱き着いていた。そして俺を見上げて、

「お兄ちゃんも恥ずかしかったんだよね？でも本当のこと言ってくれて嬉しい！！」

「で、でも…俺は変態なんだぞ？引くのが普通の反応じゃないか？」

「普通かどうかなんて関係ない。それに前にも言ったよ？どんなことがあってもマナミはお兄ちゃんのすべてを受け止める、って。

だから泣かないで、お兄ちゃん」

「え……？」

マナミに言われて初めて俺は目頭が熱くなるのを感じた。ぽろぽろと涙が零れ落ちるほどではなかったものの、親の死でさえ涙一つ流さなかった俺にしては珍しい。

「で、でもね？お兄ちゃん」

「うん？」

「律先輩にそーゆー画像を要求しちゃダメだよ？律先輩も困ってるって言ってたよ」

余計なことを！しかも自分に都合がいいように歪曲しやがって！！

「りいいいいつううううう！！！！！！！！！！！！！」

「何もネタがなかった腹いせよ。…でも明日は念のため報復を警戒したほうがよさそうね」

律、黒武者家を訪れる（後書き）

守「お疲れ様でした。今回でマナミとのデートは終わりです」

マナミ「え～、もう終わりなの？」

守「まぁな。でもお前が頼めばいつでも付き合ってやるから」

マナミ「ホント！？じゃ明日も行こ！」

マナ「ダメよ真奈美ちゃん、明日は私との約束なんだから」

マナミ「あ、そっか。じゃあ来週末にどっか遊びに出かけよ！」

マナ「あっ、マナミちゃんだけずるい！私も行きたい！！」

マナ&マナミ「・・・・・・・・・・」

バチバチバチ…

律「激しく散らしてますねぇ、火花」

綾「そうねぇ。守君はどっちとくっつくのかしら？」

オニさん「君たちはあそこの二人とはずいぶん対照的だな…」

綾「だって私結婚してるもん」

律「アタシも今は必要ないかな。時間が拘束されるだけだし」

オニさん「はぁ……やれやれ」

マナとデート（1）

――日曜日――

今日はマナとのデートの日。待ち合わせではなくマナの準備が出来次第迎えに来るということになっている。

待たせるのはまずいと思い、俺も準備をしてマナを待つ。

「お兄ちゃん！せっかくマナ先輩とデートなのにジャージでいくの！？」

「別にいいだろ？それにこっちの方が動きやすいし着慣れてるし」

「でもお兄ちゃん、もしマナ先輩がジャージできたらイヤでしょ？」

「いや、別に。意外で驚くかもしれんが」

「もーっ！！！お兄ちゃんはほんっっっとオシャレには無関心なんだから！！」

怒らせてしまったが本当のことなんだから仕方ない。それに１０分もすれば忘れてるだろう。

俺は洗面台に行き寝グセを直す。ついでに歯磨きをしておこう、入念に。

時計の針は１０時頃を指す。準備が完了した俺はマナミのチェックを受けていた。

「お財布もった？」

「あるぞ」

「ケータイは？」

「ここに」

「オッケー。…服装はサイアクだけど」

やはり服装はダメだったがそこはなんとか目を瞑ってもらってＧＯサインがでた。

「じゃ、あとはマナを待つだけだな」

俺は床に寝転がってテレビを見る。するとすぐさまマナミが

「ダメだよお兄ちゃん！ホコリがついちゃうじゃない！！」

俺を力ずくで起こし、服にコロコロをかけて埃をとる。
ほぼ毎日掃除してきれいなんだからしなくてもいいだろと言ったがマナミは聞く耳を持たなかった。

――ピンポーン

マナミがコロコロをかけてからしばらくして、マナがやってきた。
俺はマナミに見送られながら玄関を出、表でマナと合流した。

「んで、何かプランはあるのか？」

「もちろん♪」

いつも以上に上機嫌なマナ。緊張でガチガチかと思っていたが、人前に立つことが多いから緊張には耐性があるようだ。

「で、どこへ行くんだ」

「公園だよ」

「公園…緑自園（りょくじえん）か？」

緑台地自然公園、略して緑自園。椿原市のほぼ中央に位置し、これを基準に市内は４つの区域に分けられている。

余談だが鬼門、つまり北西の方は治安が悪く、不要な出入りは控えるように、とどこの学校でも指導される。

「うん。あそこなら歩いて行けるし」

歩くこと数分。緑自園の南口に到着する。町の中央にあるだけあって敷地はかなり広い。

「それで、のんびりと日向ぼっこか？」

「それもいいけど…池に行こ？」

この公園はかなりの広さを誇るだけあって池も当然あり、貸しボート屋が営業できる程度の広さだ。

ちなみに料金は一人３００円。一度乗ったら降りるまで乗り放題というシステムのため、小屋に戻って来ず乗り捨てる人もいるのだとか。

貸し小屋の中に入ると、女性が一人いた。

「おばさん、一艘かしてもらいたいんだけど…」

返事がない、やはりおばさんと言ってはいけないようだ。

「そこのねーちゃん、ボート借りたいんだけど」

「ハイ、いらっしゃい。二人で６００万両だね」

やはり若い女性として対応しなければならないようだ。だが金額に『～～万両』っていってたから墓穴だ。

桟橋へと繋がるドアを出ると旦那らしきオッサンがいた。

「やぁ、いらっしゃい。好きなボートをどうぞ

乗り終わったら好きなところで降りてもらったんで構わないから」

俺達は手近にあったごく一般的なボートを選び、乗り込んで出港した。

漕ぎ出してからしばらく、船は岸から十分に離れたところで――

「で、何かあるのか？」

「えっ？」

「わざわざ律っちゃんの手の届かない所に来たんだ。何かオフレコで伝えたいことでもあるんじゃないのか？」

「別にそんな事は考えてなかったんだけど…」

俺がそういったせいで、マナは何かないだろうかとうんうん考え始

めた。

「――あ、そうだ」

「ん？」

「御影ちゃん、今ごろどうしてるのかな。マモル君、知らない？」

「いや、知らないな。一切連絡取ってないし、噂も聞かないしな」

「三人でよく遊んだ昔が懐かしいよね」

「そうだな」

この後も昔の思い出話に花が咲き、律っちゃんが居てはできない話をすることができた。

「っっ、くぁ～～。」

こうものんびりとしていると眠くなって仕方がない。

「マモル君、眠そうだね。大丈夫？」

「意識失ったりすることはないだろうけど、寝ていいんならちょっと寝たいな」

「んー…じゃ、あそこの木の下でちょっと休憩する？」

「悪いな。この埋め合わせは必ずするから」

池に何か所かある船着き場ボートをとめ、陸に上がる。そして木へと歩く。

「それじゃ、おやすみ」

「ちょ、ちょっとマモル君！地べたに直寝するの？」

「そうだが…何か問題でもあるか？」

「帰ったらマナミちゃんに怒られると思うよ？」

確かにあり得る。埃をつけてあんなに怒られるんだから、雑草やら泥やらをつけて帰った日には俺ごと洗濯されかねない。

「じゃあ何か対策でもあるのか？」

「ジャジャーン！ブルーシートがあるんだ」

口頭でジャジャーンて…、とは思ったがそれはさておき。マナらしく準備がよく、カゴから折り畳まれたシートを取り出した。

「で、この上で寝るわけだ」

俺はさっさとブルーシートを広げ、その上に横になる。

「それじゃ、おやすみ」

ポケットからアイマスクを取り出して装着し、寝るモードに入る。

「マモル君の方が準備よすぎだよ…。」

マナとデート（1）（後書き）

マナミ「お疲れ様でした。今回はここまでです」

瑞姫「なんでジャージ族じゃだめなの？」

マナミ「なんかフケツっぽいじゃん」

瑞姫「私もジャージ族だよ？」

マナミ「みーちゃんは運動できるからいいの」

瑞姫「でも守先輩も運動できるよ、というか学年トップじゃなかった？」

マナミ「う～～～。でもお兄ちゃんはダメなの！！」

瑞姫「そういうとこは厳しいんだね…」

綾「理想の人は理想の状態であってほしいのよ、きっと」

瑞姫「流石、説得力がありますね…」

綾「あら、それは私が一回り近く年上なことへの嫌味かしら？」

瑞姫「め、滅相もありません！」

マナとデート（1．5）

一方、マナミの方はというと――

「それでは、センパイの部屋に潜入取材をしてみたいと思いまーす」

「サキちゃん、なんで小声なの？お兄ちゃんはいないよ？」

「こういうのは雰囲気が大事なの」

ドアの前に立ち、鍵がかかっていないことを確認する。

「いざ、突入！！」

サキちゃんのかけ声を合図に3人が守の部屋に入る。

「さーて、特ダネはどこかしら！？」

入って早々部屋のいたるところをくまなく探すサキ。マナミは守のベットに飛び込んでいた。リサは棚の書物に片っ端から目を通していた。

「おかしいわね…。こういう場合、ベッドの下とか引出しの中にはエロ本・エロゲーが定番なのに…」

「そうなの？」

「そうよ。マナミちゃんみたいなカワイイ妹がいる場合、大抵は妹ものか逆に姉ものがあるはずなのよ」

「そ、そうなんだ…、じゃあお兄ちゃんも…／／／」

「可能性は十分にあるわ」

「あっ！！！コレは！！」

書物を読みふけっていたリサが突然大声を上げる。

「どうしたの？リサリサ」

「見てよこれ、守先輩のアルバムよ！！」

「なんですって！？大手柄よ、理沙！」

「お兄ちゃんのアルバム！？」

三人の期待のこもった視線がアルバムに向けられる。そのアルバムの中を見ると――――

「こ、これは……！」

「マナミちゃんしか写ってない…？」

中に収められている写真はすべてマナミが写っていて、守が写っている写真は一枚もなかった。

「センパイが写ってる写真は一枚もないわね…」

「なんでかな？」

「シスコンだからじゃない？」

「やっぱそうよねー、じゃあこのアルバムはもう用済みね」

アルバムを元の場所に戻す。次に彼女らの白羽の矢が立ったのはクローゼットの中だった。

「今度こそ、何かあるはず…！」

扉を開け、中にある服をチェックする。

「……制服とジャージしかないじゃない！！」

ここにもネタがないことに不服なサキは服を押しのけてさらに奥に

進む。

「あの先輩に何も裏がないなんてことは……あらーっ！？！？」

「サキちゃん！？」

突如、サキの姿が消える。二人が慌てて近寄るも、やはりその姿はない。

「サキは先輩の部屋に巣食う魔物の餌食になってしまったのね…」

「サキちゃん…」

「ちょっと！勝手に殺さないでちょうだい！！」

壁が回転し、サキが姿を現す。

「サキちゃん！？」

「驚いたわ…まさかクローゼットの壁の一部が回転扉になってたなんて、普通なら気付かないわ」

「ということは、この先に…」

「えぇ。アタシ達の探すものがあるはずよ」

回転扉の先に進む。真っ暗な通路を進むと、小部屋に出た。
そこにはさらに他の部屋に繋がるドアがあったが、それ以外にも見所が満載だった。

「これって…暴走族とか、そういう人たちが着る服よね」

リサが取ったのは特攻服で、白と黒の二種類がそこにはあった。

「風神・雷神の二人と仲がいいのは、やっぱりそういう裏があったのね…」

「背中に書いてある『我亜瀰暗』、なんて読むの？」

「が、あ、……三文字目が読めないね」

「それは『でい』って読むのよ、だからきっとガーディアンね。いかにもセンパイらしいわ」

「ガーディアン…カッコいい名前だね！」

目をキラキラと輝かせて言うマナミ。

サキは守がこの服を着てどういうことをしていかたの見当はついていたが黙っていた。

「ふぇ～。お兄ちゃん、スーツも持ってるんだぁ」

特攻服の隣にはスーツが上下セットで2着あった。

マナミとリサは何も気にせずに物色を始めたが、サキは何か引っかかるものを感じた。

（あのスーツ…片方は普通のでしょうけど、もう片方のはビックリするくらいに『黒い』わね…。後で師匠に聞いてみましょ）

「ねぇ、これマナミちゃんだよね？」

リサが一枚の写真をマナミに見せる。そこには守とマナミが知らない年上の男と一緒に写っていた。

「確かにこれはマナミだね…」

「これっていつごろの写真？」

「ん～……小学校、かな？」

「これが先輩だとして、こっちの人は？」

「この人は・・・・・・っ！！！！」

マナミが頭を押さえて崩れ落ちる。すぐさま二人がそれを支える。

「マナミちゃん、大丈夫？」

「やっぱここは入っちゃマズイ場所だったかしらね…。一旦撤退するわよ、理沙」

「了解」

ぐったりとしたマナミを二人がかりで担ぎ、隠し部屋を後にした。

マナとデート（1．5）（後書き）

理沙「お疲れ様でした。今回の更新はここまでです。次回の更新もご期待ください（棒）」

マナミ「ちょっ、リサリサ！カンペ棒読みしちゃダメだよ！」

沙希「違うわよ、マナミちゃん。今の場合、『よく漢字が読めたね』てほめてあげるのよ」

マナミ「そんなことできないよぉ…」

守「リサちゃんってそんなになの？」

沙希「そうですよ、センパイ」

守「俺の物理の点くらい？」

理沙「さすがにそこまでは…。赤点ボーダー位です」

守「なん、だと…ｏｒｚ」

マナとデート（1－5－5）（前書き）

作者「あけましておめでとうございます」

一同「おめでとうございます」

作者「今年も皆様から一層のご愛好を頂けますよう努力していきますのでよろしくお願いします」

一同「よろしくお願いします」

作者「それでは本編をお楽しみください」

マナとデート（1－5－5）

目を覚ますとそこは学校の校庭。周りにはどこの学校の者かも知らないちゃらんぽらん共。

だが、その最奥にいる男とその取り巻きの内の一人には見覚えがある。あれはこの前河原で喧嘩をしていた奴らじゃないか？

そしてその近くには地面に突っ伏しているハギとケイがいた。だとするとあいつがターシャル・・・？

状況はよくわからないが俺一人でこいつら全員を相手にしなければならないらしい。

取り巻き達はあらかた倒した。雑兵の割にはよく訓練されていて、何発か貰ってしまい全くの無傷というわけにはいかなかった。

奥からターシャルがこっちに向かって歩いて来る。ある程度進んだところで止まり、構える。

その瞬間、闘気が解放される。周囲に独特の空気を醸し出し、周囲を圧倒させる。

（この感じ……夜叉!?）

そんなことが一瞬頭をよぎったが、容姿・体格すべてが夜叉とは明らかに違う。

俺の動揺を察知してかターシャルは不敵な笑みを浮かべた。

「守さん、俺の声に聞き覚えはありませんか?」

「お前の声…?」

確かに、声を聞くのは初めてのはずだがどこか聞き覚えがある。

思い出してみる、が、当然思い出せるはずもなく沈黙が続く。

「やれやれ、僕が分からないのかい?守君」

「……！」

俺のことを君付けで呼び、一人称が『僕』のやつといえば…

「…真人か」

「やっと思い出してくれた？嬉しいなぁ」

ターシャルは一度俺に背を向けて自分の顔をぺたぺた触る。

その後に俺の方を向いた時には、さっきまでとは一変、真人の顔になっていた。

「真人、お前は一体…」

「そうだね、ここいらで一回ちゃんと自己紹介しておこうかな。

ある時は強襲のエージェント『夜叉』・またある時はごく普通の高校生『木下真人』

そしてその正体は…変装・潜入のエキスパート『緊那羅』。それが僕さ」

「お前…過激団の一員、しかも幹部クラスだったのかよ…」

「知らなかったのかい？調べが足りないね。僕は初対面の頃から君の裏の顔を知ってたよ？」

「…こいつは恐れ入ったな。それにしてもお前が八部衆の名を二つ

も持っているとはな」

「それはただの人手不足だよ、見合う実力者がいないんだ。『天』だけは永久欠番になってるけど」

真人は一通りを話すと構えを解き、俺に手を差し延ばす。

「守君も過激団（ウチ）に来ないかい？君なら僕の『夜叉』を明け渡してあげてもいいんだけど」

「あいにく俺は義理堅いんでね、そう易々と鞍替えをするつもりはない」

「そっか…。予想はしてたけど、残念だなぁ」

差し伸べていた手を引っ込め、再び構える。

「こうなったら死んでもらうしかないね」

戦いは避けられないと察し、こちらも構える。この時俺はあることを考えていた。

もしあいつの言ったことが本当だったとしたら、俺の実力では敵いそうにない。だが本当にそうだったらわざわざ雑兵を使って俺の戦闘力を削っておく必要があっただろうか？

導き出される結論は一つ、『真人≠夜叉』だ。そう思うとなんだか気が楽になった。

二人とも後ろに下がり、一直線に直進する。そこから全エネルギーを拳に込めて打ち出す。

二人の拳が衝突するその瞬間――

「――ハッ！・・・夢か」

どうやらさっきまでのは夢だったらしい。時刻を確認すると、午後1時前。2時間程度寝ていたようだ。

寝たときはシート越しだったはずだが、起きてみると心地よい柔らかさと温かさを感じる。周囲の状況を確認しようと手を四方八方に伸ばす。

手を動かしているうちに目が冴えて意識がはっきりしてくる。そして気付く、俺はいつの間にかマナに膝枕されていたのだ、と。

「あ、マモル君…おはよう」

「あ、あぁ…おはよう」

さっきまでの奇行を終始マナに見られていた。そう思うと体が火照り、俺を紅く染め上げる。

「起きたことだし、お昼食べる？」

「そ、そうだな。でもその前に飲み物ないか？」

「あー…ゴメン、お茶持ってくればよかったね」

「んじゃ買ってくる。来るか？」

「う、うん。行く！」

財布から小銭を取り出し投入する、自販機のボタンに光が灯る。その中から俺はお茶を選び、ボタンを押す。

「……。」

商品が出てこない。押しが甘かったのかもしれないと思い、今度は強めにボタンを押す。

「……。」

やっぱりお茶は出てこない。一刻も早く飲み物が欲しかった俺は『実力行使』に出ることにした。

少しだけ集中し、気を静め雑念を払う。

「だ、ダメだよマモル君！！器物損壊になっちゃうよ！」

「誰も壊しゃしないって。それよりも俺がいいっていうまで後ろを向いててくれないか？」

「う、うん…。わかった」

マナが背を向ける。すかさず俺はポケットから『専用の道具』を使って鍵と格闘を始める。

たまたま周りに人がいないとはいえ、1分もすれば人が来る。悠長にやっている余裕はない。

そんなことを考える間に申し訳程度についている防犯用の錠前を全て外す。そして自販機の扉の開放に取り掛かる。

数秒後には開けることに成功し、目的の品を手に入れる。

あとは扉を閉めて施錠し、最初の状態に戻す。これまで時間にしておよそ５０秒、幸いにも目撃者はいないようだ。

「もういいぞ」

「えっ、もういいの？」

「あぁ。戻るぞ」

さっきの木の下に戻ると、マナは手荷物からサンドイッチを取り出

し、包みをはがす。

「マモル君は嫌いなものなかったよね？」

「ないな」

「じゃあ…はい、コレ」

マナから渡されたサンドイッチを味わう。食べてみるとマナミの手料理クラスに美味かった。

こうして俺達はのんびりと昼食を味わった。

マナとデート（1－5－5）（後書き）

作者「お疲れ様でした。今回分の更新は以上となります」

マナ「新年一発目が夢の話なんて奇遇だね」

守「初夢にしてはろくでもない夢だがな…」

マナ「でもこれって重要なイベントなんだよね？」

守「さぁ？どうだろうな、所詮は夢だし」

マナ「そ、そんな身もふたもない…」

律「てかアンタどこであんな技術身に付けたのよ」

守「言うわけないだろ」

律「あんなことしなくても蹴ったんで十分だったでしょうに…」

マナミ「お兄ちゃんは昔自販機を蹴って壊しちゃったことがあるんだよね～」

守「マ、マナミ！いらんこと言うな！」

マナミ「ふーんだ」

綾「マナミちゃん、不機嫌ね。膝枕への嫉妬かしら？」

オニさん「でしょうね。女の嫉妬って怖いわー」

綾「ホントね」

瑞姫「ふ、二人とも女性ですよね…？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0470u/

黒武者兄妹記（仮）

2012年1月5日01時54分発行